

平成24年度

農業試験場年報

秋田県農業試験場

平成 24 年度

農業試験場年報

目 次

1. 農業試験場中長期計画の基本方針	1
2. 試験研究成果の概要	3
3. 一般報告	25

1. 農業試験場中長期計画の基本方針

(1) 農業試験場中長期計画（平成22年3月作成）

本県農業は、担い手の高齢化や地球温暖化への対応など多くの課題に直面しているが、広大な農地をより有効に活用し、多様化する消費者ニーズに的確に対応することで、農産物の生産供給をさらに拡大できる潜在能力を有している。

農業試験場は、技術水準の向上を通じ、生産振興と食料の安定供給に資する役割を担っている。そのため、オリジナル品種の開発と、機械化・低コスト化技術および高品質安定生産技術、販売戦略の構築を追求しつつ、生産者・消費者・環境にやさしい栽培技術の開発、地球温暖化に備えた気象変動対応技術、新エネルギー活用技術の開発を進めることとする。

農業試験場は、『農家所得の向上と経営安定化』、『農業の振興に貢献する技術の開発』をミッションとし、

I. 新エネルギーを活用した農業生産技術の開発

重点テーマ①：太陽光パネルを活用した栽培技術の確立

重点テーマ②：地中熱を活用した栽培技術の確立（事業課ならず課題なし）

II. 環境や人に配慮した農産物生産技術の確立

重点テーマ③：持続的な農業生産技術の確立

重点テーマ④：減農薬栽培技術の確立

重点テーマ⑤：農産物生産に向けた汚染土壌対策の推進

III. 育種による秋田ブランドの確立

重点テーマ⑥：県オリジナル品種によるブランド品目の生産拡大

重点テーマ⑦：他場所有成品種の地域適応性検定

IV. マーケティングの推進と生産組織への支援による経営基盤の強化

重点テーマ⑧：需要に対応した生産体制の確立

重点テーマ⑨：集落営農組織の維持・発展可能性の解明

V. 水田をフル活用する栽培技術の開発

重点テーマ⑩：水田の生産力向上技術の確立

VI. 栽培技術の開発による秋田ブランドの確立

重点テーマ⑪：気象要因の解明による安定生産技術の確立

重点テーマ⑫：転作畑における野菜の高品質生産技術の確立

重点テーマ⑬：省力・省資源型栽培技術の確立

VII. 優良種苗の増殖供給

重点テーマ⑭：主要農作物の原原種と原種の安定生産

重点テーマ⑮：野菜等種苗の安定生産

の7つを基本方針と15の重点テーマとした。

農業試験場では、これらの施策と一体となって現場ニーズに即した試験研究の推進と研究成果の迅速な普及を推進するために、

- ①県農業の基軸となる水稻及び野菜、花きなどの戦略作物に関する革新技術の開発とその普及
- ②生産現場を支える体系的な技術を迅速に確立、普及するため、プロジェクトチームの編成などにより 部門の枠を越えた総合的な研究に取り組むと共に、
- ③地域農業の担い手の確保と育成や、農村地域の活性化などへの支援
- ④県農林水産系研究機関など他の研究組織等との連携強化を図っていくこととしている。

(2) 組織・人員

農業試験場は、総務管理と企画経営の2室3班と研究4部11担当及び経営班の1班が研究業務を行っている。

また、46名の研究員と2名の技師計48名が研究業務を担っており、12名の技能職員の他非常勤職員、臨時職員を含めると総勢113名で農業試験場の業務を行っている。

○組織・人員

平成24年4月1日現在

区 分		行政職	研究職	技能職	非常勤	臨時職員	計
場長			1				1
主席研究員			1				1
総務管理室	総務班	6		1		1	8
	管理班	2		10		16	28
企画経営室	企画班	4			3		7
	経営班		4			1	5
作物部	作物栽培担当		5			1	5
	水稻育種担当		4		1	1	4
原種生産部	系統管理担当		4		1	2	4
	原種生産担当		2				2
野菜・花き部	野菜担当		5			1	6
	花き担当		3			3	6
	園芸育種・種苗担当	1	4		1		6
生産環境部	環境調和担当(大潟農場)	1	2	1		1	5
	土壌基盤担当		4		2	3	9
	病害虫担当		5		1		6
	機械技術担当		2		1	1	4
計		14	46	12	10	31	113

※臨時職員は4月1日現在の人数である。

2. 試験研究成果の概要

基本方針Ⅰ. 新エネルギーを活用した農業生産技術の開発

地球温暖化により、農業部門でも二酸化炭素（CO₂）排出量の削減が求められており、自然エネルギーを活用した新たな栽培技術開発が望まれている。そこで農業分野での利活用が進んでいない太陽光、地中熱、雪や小水力発電等地域で利用可能な新エネルギーを積極的に利用した栽培により、二酸化炭素（CO₂）削減、省エネ・低コスト、高品質・多収生産に向けた技術を確立する。

重点テーマ①：太陽光パネルを活用した栽培技術の確立

太陽光パネルの発電量の時間的、季節的变化を調査し、発光ダイオードと太陽光パネルを用いたキク電照栽培の実証を行い、省エネ栽培体系を構築する。

1. H24年度取組内容

- （1）電照装置の太陽光パネルの設置角度は3段階（10°、20°、30°）の可変式のため、4月～11月に月別に設置角度別の1日当たりの発電量（電照能力）を調査する。
- （2）電照装置1セット当たりの点灯可能LED電球の個数を増やすために、点滅電照（1秒、1分、10分間隔）による花芽分化抑制効果と消費電力量について検討する。

2. 成果

- （1）1日当たりの発電量は、設置角度及び月別により差があり4、7、8、9月は10°が高く、5、10、11月は30°が高かった（6月は計測器の故障により欠測）。電照能力に関しては、3段階のすべての設置角度において夜間4時間の電照を行うことができた。
- （2）LED電球を用いた点滅電照では、夜間4時間電照で60日間点滅を繰り返しても、すべての区において球切れすることはなかった。点滅電照によるキクの出蕾期はすべての点滅電照区において無電照区よりも遅くなり、花芽分化の抑制効果が認められた。点滅間隔は短いほど消費電力が少なく、1秒間隔の点滅では連続点灯の約1/2の消費電力であり、連続点灯の2倍のLED電球を使用できることが明らかになった。

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	太陽光発電を活用したキク電照栽培システムの確立(H23～25)

4. 課題・今後の方針

- ・今後、産業技術センターと協力し、電流変換によるエネルギーロスがない直流型電照装置・回路や花芽分化抑制効果のある直流型LEDを作成し、エネルギーロスの少ない電照装置を開発する。

基本方針Ⅱ．環境や人に配慮した農産物生産技術の確立

消費者が求めている安全・安心な農作物を生産するため、「あきたe c o らいす」の技術支援に加え、効率的な病害虫防除技術、有機質資源の循環利用による地力維持技術および作業労力軽減のための機械技術の開発に取り組む。

また、環境保全の面からは水田からの水質負荷削減と温室効果ガス発生量の削減技術やバイオマス原料としてソフトセルロースの有効利用技術の開発を行うとともに、カドミウム等に汚染された農用地への客土に変わる対策として植物浄化技術の早期実用化を目指す。

重点テーマ③：持続的な農業生産技術の確立

県内の主要な堆肥センターで生産する家畜ふん堆肥の肥効特性の分析と定点ほ場などの土壌理化学性の調査、作物生育および栽培管理情報から化学肥料の減肥基準や土壌養分の適正維持水準を明らかにし、水稻、畑作物、野菜および花き栽培における化学肥料並びに家畜ふん堆肥の施用技術を普及する。これらの作物を組み合わせた持続的な農業生産技術を確立する。

閉鎖水系水田地帯における疎植、無代かき栽培、前期深水栽培を組み合わせた環境調和型水稻作技術の開発を進め、水田からの水質負荷削減、温室効果ガス発生量削減の評価および技術定着を図る。

新しく開発された病害虫防除薬剤、除草剤・生育調節剤の有効性を検証して「秋田県農作物病害虫・雑草防除基準」に反映するとともに、新肥料、新資材についても適切な施用法、使用法を検討する。

糖化处理、酵母処理および蒸留で生じたバイオエタノール生産残渣を圃場へ還元した場合の水稻栽培への影響や土壌に及ぼす影響を明らかにする。

1. H24年度取組内容

- (1) 地域内有機質資源のフル活用による持続的農業生産技術の推進
土壌タイプ別に地域内有機質資源（堆肥）による化学肥料代替量を検討し活用促進を図る。
- (2) 環境にやさしい安全安心農業体制確立事業
有機質資源連用栽培試験並びに土壌診断に応じた野菜の合理的なリン酸、カリ施肥技術の確立を行い、土壌の栄養状態の適正な維持と減肥基準（暫定版）改訂の資料とする。
- (3) 閉鎖水系水田地帯における畜産由来有機性資源を利用した環境調和型水稻作技術の実証と改良
疎植、無代かき栽培、前期深水栽培を組み合わせた環境調和型水稻栽培が、水質及び温室効果ガス発生量及び収量・品質へ及ぼす影響を検討するとともに現地で実証する。
- (4) 土壌由来温室効果ガス計測・抑制実証普及事業
県内現地ほ場の地目・土壌群毎の土壌炭素量及び施肥法による影響を明らかにする。
- (5) 八郎湖「わがみずうみ」創世事業
干拓地外の慣行水田における排出負荷量の動態を調査し、水田原単位設定に資する。
- (6) 新肥料・新資材の利用技術
新資材について県内での有効性・実用性を確認し、利用を図っていく。
- (7) 新除草剤・生育調整剤の実用化に関する試験
新資材について県内での有効性・実用性を確認し、利用を図っていく。
- (8) 新農薬の実用化試験

新資材について県内での有効性・実用性を確認し、利用を図っていく。

(9) 稲わらを原料とするバイオエタノール実証試験

稲わらを原料としてバイオ燃料の製造等に係わる技術を確立するために、1)稲わらを継続的に収奪した場合の水稲生育や土壌の理化学性に及ぼす影響の解明、2)バイオ燃料製造時に発生する発酵残渣のほ場還元を含めた有効活用方法の検討、3)ほ場から稲わらを効率的に収集・運搬できるシステムを確立する。

(10) 農業用機械バイオエタノール対応試験

ガソリンエンジン搭載乗用型田植機におけるバイオエタノールの燃料特性を検討する。

2. 成果

(1) 地域内有機質資源のフル活用による持続的農業生産技術の推進

露地キャベツ栽培で、堆肥利用による化学肥料代替は環境負荷軽減技術であることを明らかにした。

【参考事項】畑ほ場における有機物施用と土壌炭素量の維持

(2) 環境にやさしい安全安心農業体制確立事業

12年間の堆肥連用で土壌中の可給態リン酸及び交換性カリは、堆肥上乘せにより年々蓄積する傾向にあることから、化学肥料のリン酸とカリを4年間無施肥にしても、堆肥を施用することで土壌中のリン酸とカリは大きな減少や蓄積は見られないことを明らかにした。

(3) 閉鎖水系水田地帯における畜産由来有機性資源を利用した環境調和型水稲作技術の実証と改良

無代かき、前期深水管理とも各水質汚濁物質の削減効果が認められた。また、無代かきほ場は、代かきほ場に比べ温室効果ガス(メタンガス)発生量が少ないだけでなく、代かきほ場より水稲の生育・収量が優れており、特に浅水・無代かきほ場は慣行収量を5%上回った。

【参考事項】八郎潟干拓地の代かき水田における流入水の増加に伴う水質汚濁物質の浄化

【参考事項】無代かき栽培における移植直前灌水によるメタンガスの抑制と水稲生育への影響

(4) 土壌由来温室効果ガス計測・抑制実証普及事業

県内67地点において調査し土壌群毎の炭素量及び堆肥施用の影響を明らかにした。

(5) 八郎湖「わがみずうみ」創世事業

三種川及び馬場目川流域における原単位を提示した。

(6) 新肥料・新資材の利用技術

肥料については製品開発、販売計画の資料とした。

(7) 新除草剤・生育調整剤の実用化に関する試験

農薬については平成25年度版「秋田県農作物・雑草防除基準」に反映した。

(8) 新農薬の実用化試験

農薬については平成25年度版「秋田県農作物・雑草防除基準」に反映した。

【参考事項】秋田県の大豆ほ場における帰化アサガオ類の発生状況調査と現地対応

(9) 稲わらを原料とするバイオエタノール実証試験

3年の短期間の稲わら持ち出しでは収量は変わらない。また、作土の理化学性では稲わら持ち出しにより交換性カリの低下が見られるものの、その他の化学性は変わらない。

糖化残渣はpHやC/N比を改良したものは利用可能であった。

現地大区画水田ほ場において、コンバイン収穫後稲わらの収集運搬作業を反転→集草→梱包(自走式ロールベア)→運搬の体系で行った場合の作業時間は3.36h/haであった。

【参考事項】 稲わら持ち出しが土壌の交換性カリに及ぼす影響

【参考事項】 大区画水田ほ場におけるコンバイン収穫後稲わらの収集運搬体系の作業効率

【参考事項】 反転作業と土壌水分がコンバイン収穫後稲わらの乾燥に及ぼす影響

【参考事項】 大豆子実用高周波容量式水分計によるコンバイン収穫後稲わら水分の簡易測定

(10) 農業用機械バイオエタノール対応試験

エタノール混合ガソリン（E10）の燃料消費量はガソリン区よりも5%多かったが走行性に差がないことを明らかにした。

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	地域内有機質資源のフル活用による持続的農業生産技術の推進 (H24～28)
2	環境にやさしい安全安心農業体制確立事業 (H20～24)
3	閉鎖水系水田地帯における畜産由来有機性資源を利用した環境調和型水稻作技術の実証と改良 (H23～25)
4	土壌由来温室効果ガス計測・抑制実証普及事業 (H20～24)
5	八郎湖「わがみずうみ」創世事業 (H23～24)
6	新肥料・新資材の利用技術 (S54～)
7	新除草剤・生育調整剤の実用化に関する試験 (S29～)
8	新農薬の実用化試験 (S43～)
9	稲わらを原料とするバイオエタノール実証試験 (H20～24)
10	農業用機械バイオエタノール対応試験 (H23～24)

4. 課題・今後の方針

(1) 土壌診断に応じた堆肥とその肥料代替量を減肥した組み合わせによる現地実証を行うとともに、土壌タイプ別での堆肥の肥料代替量を検討する。また、堆肥施用による環境負荷への影響を調査する。

(2) 有機質資源連用栽培試験並びに野菜の合理的なリン酸、カリ施肥技術の確立を行う。

(3) 環境調和型水稻栽培技術について水質改善と温室効果ガス発生量の削減効果及び収量・品質を評価するとともに現地ほ場で適応性を評価する。

(4) 組換え新規課題で継続する。

(6)・(7)・(8)

新肥料・資材等について、本県における農作物生産への適応性等を明らかにし施用法を確立するとともに、新除草剤・生育調整剤・新農薬の実用化に関する試験及び農薬登録に向けた試験を行う。

(5)・(9)・(10) 研究課題は完了した。

重点テーマ④：減農薬栽培技術の確立

安心安全な「あきたe c oらいす」のスタンダード化に向けて技術的支援を行い、将来目標の販売シェア90%および二酸化炭素（CO₂）の発生抑制に寄与する。さらに「あきたe c oらいす」のバージョンアップを図るため、農薬の総防除回数を現行の1/4以下、成分数や散布量の削減、後作への農薬残留を考慮した防除技術を開発するとともに、有機質利用による化学肥料を半減した栽培技術の確立をめざす。

これらにより農業者に対しては、農薬被曝の軽減、作業負担軽減および生産費軽減が図られ、消費者へは安全・安心で環境に配慮した食料を供給する。畑作についても同様の取り組みを行う。

1. H24年度取組内容

(1) 人と環境に優しい新たな秋田米生産技術体系の確立

人と環境に優しい「あきたecoらいす」栽培技術を確立するために、現地等において病害虫試験、除草剤試験、施肥試験、及び残留農薬試験を実施する。

(2) 病害虫発生予察事業

配当事業として、水稲や野菜の総合防除技術の確立を行うとともに、水稲稲育苗後作野菜における農薬残留試験を行う。

(3) 農薬環境リスク低減防除技術確立事業

配当事業として、水稲や野菜の総合防除技術の確立を行うとともに、水稲稲育苗後作野菜における農薬残留試験を行う。

(4) 農薬安全指導等特別対策事業

配当事業として、水稲や野菜の総合防除技術の確立を行うとともに、水稲稲育苗後作野菜における農薬残留試験を行う。

(5) あきたecoらいす対応温湯消毒試験

種子消毒薬低減をめざし、温湯浸法消毒種子による直播栽培の出芽・苗立ち、病害発生を検討する。

(6) 園芸作物病害虫の現場対応型防除技術の開発

農家等から依頼された病害虫の診断を迅速に行い適切な防除対策を助言・指導する。

2. 成果

(1) 人と環境に優しい新たな秋田米生産技術体系の確立

- ・ビームゾルの育苗箱半量施用は葉いもちの発生が少なく、穂いもちの防除も可能であることを明らかにするとともに、抵抗性誘導型の薬剤であるイソチアニル粒剤等は、苗の葉いもちに対して防除効果が低く、育苗期いもち防除剤としては用いることができないことを明らかにした。
- ・出穂期が8月上旬で、水田内のノビエ穂数が8月中旬以降に増加する条件下では、8月下旬のノビエ穂数が多いほどアカスジカスミカメによる斑点米被害が増加した。また、ノビエ密生地が周囲に及ぼす影響範囲は90cm程度で、距離に応じて斑点米混入率は減少することを明らかにした。
- ・早生品種は、カスミカメムシ類の発生盛期と割籾の増加時期が登熟期後半で一致するため、斑点米は側部加害が主体になると推察され、中晩生品種は、登熟期前半からカスミカメムシ類が確認されるため頂部加害の割合が早生品種よりも高くなることが明らかとなった。
- ・いもち病の育苗期防除に用いたトリシクラゾールの玄米における残留はいずれも0.01ppm未満(定量限界未満)を明らかにした。
- ・土壌診断に基づいた施肥設計をもとに育苗箱全量施肥と堆肥または側条施肥を組合せたところ、堆肥との組合せでは、慣行に及ばなかったものの、一穂粒数と千粒重は目標収量である570kg/10aを十分に確保できることを明らかにした。側条施肥との組合せでは、穂数が多かったが、登熟歩合と千粒重が小さく慣行と比べ収量が少なかった。

【普及事項】ビームゾル剤の低濃度処理及び各種箱施用剤の苗の葉いもち防除効果

【参考事項】 水田内にノビエが多いと斑点米が増加するが、その影響範囲は局所的である

【参考事項】 水稻の育苗箱施用剤（ファーストオリゼフェルテラ粒剤） 使用ハウスでは後作葉菜類への成分残留濃度は低い

(2) 病害虫発生予察事業

水稻のアカスジカスミカメ、食用ぎくのアザミウマ類に対する総合防除技術の確立、水稻育苗ハウスにおける後作野菜の農薬残留について評価した。

(3) 農薬環境リスク低減防除技術確立事業

水稻のアカスジカスミカメ、食用ぎくのアザミウマ類に対する総合防除技術の確立、水稻育苗ハウスにおける後作野菜の農薬残留について評価した。

(4) 農薬安全指導等特別対策事業

水稻のアカスジカスミカメ、食用ぎくのアザミウマ類に対する総合防除技術の確立、水稻育苗ハウスにおける後作野菜の農薬残留について評価した。

(5) あきたecoらいす対応温湯消毒試験

- ・ 苗立ち率について、温湯浸法消毒種子と農薬消毒種子の差は認められなかったが、コンテナ試験によるばか苗防除効果については、温湯浸法消毒処理区で反復間のバラツキが大きかった。

(6) 園芸作物病害虫の現場対応型防除技術の開発

- ・ 診断依頼110件について対応し、防除技術を提示した。
- ・ 由利本荘市のりんどうほ場でチョウ目幼虫による根部への食害が確認され、発生種をキオビトガリメイガと同定し、発生地域、生態を明らかにした。

【普及事項】 物理的防除資材を利用した食用ぎくのアザミウマ類に対する減農薬防除技術

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	人と環境に優しい新たな秋田米生産技術体系の確立 (H20～24)
2	病害虫発生予察事業 (S16～)
3	農薬環境リスク低減防除技術確立事業 (H21～25)
4	農薬安全指導等特別対策事業 (H16～25)
5	あきたecoらいす対応温湯消毒試験 (H23～24)
6	園芸作物病害虫の現場対応型防除技術の開発 (H21～25)

4. 課題・今後の方針

- (1) 新規課題「人と環境に優しい水稻減農薬防除技術の確立」で、病害は育苗期並びに本田でのより効果的な防除技術について、虫害はアカスジカスミカメと寄主となる水田内雑草量の関係が斑点米混入率に与える影響を解明し、効率的防除法を確立する。さらに水田内雑草を抑制する効果的な除草体系を確立する。
- (2)・(3)・(4)・(5) 本事業により総合防除の確立及び農薬残留について取り組む。
- (6) 依頼された病害虫の診断を迅速に行い適切な防除対策を行うとともに、メジャー、ブランド及び地域特産園芸作物病害虫の効率的防除技術の確立を行う。

重点テーマ⑤：農産物生産に向けた汚染土壌対策の推進

水稲については、食品衛生法改正で米のカドミウム（Cd）含有基準が引き下げられたことに対応するため、水管理の技術的支援やカドミウム高吸収水稲品種「長香穀」を用いた植物浄化技術（ファイトレメディエーション）開発を進める。植物浄化実証モデル地区では、「長香穀」の適正な栽培法を指導し、修復効果を実証する。併せて生産された植物浄化残渣の有効活用を試みる。

DNAマーカーを利用し、「長香穀」の欠点である脱粒性、倒伏性を改良したカドミウム高吸収性水稲品種の育成を行う。

地下かんがいを利用した根域制限や還元状態維持によるカドミウム吸収抑制技術を開発する。

1. H24年度取組内容

(1) 土壌環境総合対策事業

改正細密調査として、客土による恒久対策を実施した水田の玄米カドミウム濃度を調査する。また、ダイズのpH改良資材畝内部分施用による吸収抑制効果、湛水管理ほ場の収穫時の地耐力向上の実証を行う。

(2) 生産・流通・加工工程における体系的な危害要因の特性解明とリスク低減技術の開発

植物浄化後のダイズ栽培におけるカドミウム吸収抑制技術を検討する。同時にダイズの子実カドミウム濃度を各種パラメーターから予測する手法を確立する。また、アルカリ資材による吸収抑制を検討する。

(3) カドミウム吸収抑制技術普及推進事業

県内12カ所（19筆）で植物浄化実証を行うとともに、その付近で湛水管理実証を実施する。これらをもとに大規模吸収抑制モデル地域での実証を行う

(4) 長香穀米を用いた土壌浄化におけるカドミウム高含有バイオマスの有効利用技術の開発

植物浄化によって減少した土壌栄養分を把握し、アルコール発酵後の残渣を用いて肥沃度を回復する手法を開発する。

(5) DNAマーカーを利用したカドミウム高吸収性品種の育成

カドミウム高吸収品種の育成に向けて、有望系統の諸特性について調査する。

(6) カドミウム低吸収ダイズのカドミウム吸収・蓄積と吸水機能の関係解明

ダイズのカドミウム吸収量について、根圏温度と吸収量との関係について調査する。

2. 成果

(1) 土壌環境総合対策事業

玄米1191地点、土壌368地点についてカドミウム濃度を調査した。0.4mg/kgを超過した玄米は27試料あり、H23年度の42点より減少したことを確認した。

ダイズのpH改良資材の畝内部分施用による吸収抑制効果については、生育や収量は向上したものの、子実カドミウム濃度は抑制できなかった、これは気象経過により資材の溶解が遅れたためと考えられた。

モミガラ補助暗渠を施行したほ場について、湛水期間終了後の排水性は良好になり、収穫作業に支障はないことが明らかとなった。

(2) 生産・流通・加工工程における体系的な危害要因の特性解明とリスク低減技術の開発

ソルガム、長香穀を4年間修復栽培したときの総カドミウム吸収量、土壌カドミウム低減程度が明らかになった。その跡地で栽培したダイズの子実カドミウム濃度は、無作付区より低濃度になり、修復栽培の効果が確認さ

れた。3年分のデータから得られた予測式は、異なる年次、地域、土壌条件に関わらず、予測値と実測値の適合性が得られた。

土壌 pH は各地区とも炭カル区が生育期間を通して相対的に高く推移し、炭カルでは半量施用でも苦土石灰と同等の pH 上昇効果が得られた。

【普及事項】植物浄化が実施できるイネ「長香穀」の栽培管理マニュアル

(3) カドミウム吸収抑制技術普及推進事業

長香穀を利用した植物浄化による本年のカドミウム吸収量は概ね100g/haを超え、植物浄化工程が安定しつつあると考えられた。

(4) 長香穀米を用いた土壌浄化におけるカドミウム高含有バイオマスの有効利用技術の開発

長香穀を用いたファイトレメディエーションにより、持ち出される土壌養分量（作物養分吸収量）は年次間またはほ場間で概ね一定であることを明らかにした。アルコール発酵後の残さを混合した堆肥は一般の堆肥と同等に使用することが可能であった。

(5) DNAマーカーを利用したカドミウム高吸収性品種の育成

カドミウム収奪量能力、茎葉乾物重、耐倒伏性、耐病性、脱粒性などの試験結果から総合的に系統評価し、有望系統に「秋田110号」の地方番号を付した。

(6) カドミウム低吸収ダイズのカドミウム吸収・蓄積と吸水機能の関係解明

リュウホウでは根圏温度が25℃～15℃の範囲でカドミウムの吸収量が多くなることを明らかにした。

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	土壌環境総合対策事業 (H19～25)
2	生産・流通・加工工程における体系的な危害要因の特性解明とリスク低減技術の開発 (H20～24)
3	カドミウム吸収抑制技術普及推進事業 (H21～25)
4	長香穀米を用いた土壌浄化におけるカドミウム高含有バイオマスの有効利用技術の開発 (H22～24)
5	DNAマーカーを利用したカドミウム高吸収性品種の育成 (H20～24)
6	カドミウム低吸収ダイズのカドミウム吸収・蓄積と吸水機能の関係解明 (H22～24)

4. 課題・今後の方針

- (1) 改正細密調査並びにカドミウムのリスク管理対策について実施する。
- (2) 新規課題「水稻におけるヒ素リスクを低減する栽培管理技術の開発」で、農業環境技術研究所が開発したカドミウム超低吸収品種を用いて、収量や品質に影響なく、ヒ素とカドミウム吸収を同時に低減する栽培管理技術の開発する。
- (3) 植物浄化実証を行い、併せて湛水管理実証並びに大規模吸収抑制モデル地域での実証を行う。
- (4) なし
- (5) 「秋田110号」他のカドミウム収奪能力等について、実用性を評価する。
- (6) なし

基本方針Ⅲ．育種による秋田ブランドの確立

水稲、野菜、花きについて、秋田県の気象に適合し栽培特性のすぐれた優良品種の育成に対する要望はますます高まっている。実需者のニーズを見据えた育種を継続して行い、県独自品種を柱とした「秋田ブランド」の確立を目指す。

重点テーマ⑥：県オリジナル品種によるブランド品目の生産拡大

（水 稲）

秋田米のブランド向上のため、早生～晩生の良食味品種群を構築する。特に地球温暖化に対応し、高温耐性に優れた品種を育成する。また、直播適応性を有する良食味品種やもち米、酒米、超多収米の加工用品種を開発する。

（野 菜）

転作畑を主体に作付けが進められている土地利用型野菜であるネギ、エダマメ、作付面積が国内上位で栽培適地であるスイカ、メロン、収穫が容易で軽労化が期待できるイチゴについて育種を進める。

- ・エダマメについては8月下旬～9月下旬どりの良食味で茎疫病、黒根腐病に強い品種を育成する。
- ・ネギについては周年化、省力化を目指して、6月および夏秋どり品種を育成する。
- ・スイカについては、「あきた夏丸」「あきたシャリン娘」の改良を図る。大玉スイカでは種なし、小玉スイカでは種なし・裂果しにくい・小玉化等消費者ニーズに対応した育種を進める。
- ・メロンについては、えそ斑点病抵抗性品種、難発酵果品種を育成する。
- ・イチゴは四季成り性、大果で、日持ち性が優れる萎黄病抵抗性品種を育成する。

（花 き）

トルコギキョウは「こまちホワイトドレス」の花色シリーズ化や抑制作型向け晩生品種、花蕾調製不要な省力品種を育成する。シンテッポウユリについては、葉枯れ病に強く、需要期集中出荷品種を育成する。

1. H24年度取組内容

- | | | |
|--|---|-----------------------------------|
| (1) 主要農作物奨励品種決定調査
(2) 奨励品種候補の普及適応性調査
(3) 第3期次世代銘柄米品種の開発 | } | 秋田米のブランド力向上のため、早生～晩生の良食味品種群を構築する。 |
| (4) 地球温暖化に対応した水稲品種の開発と栽培技術の確立
地球温暖化に対応し、高温耐性に優れた品種を育成する。 | | |
| (5) 水稲直播用品種と高品質加工用米品種の開発
直播適応性を有する良食味品種やもち米、酒米、超多収米の加工用品種を開発する。 | | |
| (6) 新規澱粉米品種の育成
特色ある澱粉特性を有する変異系統を用いて新規澱粉米素材を開発する。 | | |
| (7) 地域流通する加工用米を用いたレーサビリティ清酒「まるごと秋田清酒」の開発
「あきたこまち」より多収で70%精米歩合歩留まりが高い、酒造用低コスト原料米を開発する。 | | |
| (8) 秋田米食味向上対策事業
良食味品種開発のため、玄米内部品質と食味評価の関連について検討する。また、食味ポテンシャルを最大限発揮させる栽培技術体系を確立する。 | | |

- (9) 耐冷性といもち病抵抗性を兼ね備えた極良食味及び業務用米品種の開発と普及
青森県及び宮城県の開発材料について、穂いもちほ場抵抗性を評価し品種選抜・育成の基礎資料とする。
- (10) 秋田ブランド野菜産地拡大・強化を目指したオリジナル品種の育成
野菜（エダマメ、ネギ、スイカ、メロン、イチゴ）では、それぞれの用途に応じた品種を育成する。
- (11) 秋田ブランド花きを目指す新品種育成
トルコギキョウについて育種母本の固定化の促進と、それらのF1組み合わせ能力検定を行い、有望系統の選抜を行う。シンテッポウユリについて葉枯れ病に強い個体や4倍体系統の選抜を行う。

2. 成果

- (1) 主要農作物奨励品種決定調査
- (2) 奨励品種候補の普及適応性調査
- (3) 第3期次世代銘柄米品種の開発

早生品種「秋のきらめき」、晩生品種「つぶぞろい」を育成し、早生～晩生までの良食味品種ラインナップを完成した。

【普及事項】早生で良食味の水稲新品種「秋のきらめき」

【普及事項】晩生で多収・良食味の水稲新品種「つぶぞろい」

- (4) 地球温暖化に対応した水稲品種の開発と栽培技術の確立
高温耐性に優れる品種を交配母本に用いるとともに、高温登熟耐性検定施設を利用して育成系統の選抜を行った結果、“極強から強”が「秋系726」、「強」が「秋のきらめき」ほか7品種・系統を選定した。
- (5) 水稲直播用品種と高品質加工用米品種の開発
直播適応性は、低温出芽・苗立・伸長性に優れる遺伝子領域が明らかになっていることから、DNAマーカーを利用して遺伝子領域を集積する系統を育成した。もち米の「秋田系糯716」は、多収で加工適性が優れることから、糯有望系統「秋田糯113号」として選定した。加工用米では、「あきこまち」より多収穫である「秋系690」を「秋田107号」として、現地における栽培特性と醸造特性の評価をした。
- (6) 新規澱粉米品種の育成
低アミロース系統を示すSSIVb欠損e8系統は登熟気温によるアミロース含量変動が粳に近いことを明らかにした。
- (7) 地域流通する加工用米を用いトレーサビリティ清酒「まるごと秋田清酒」の開発
「秋田107号」は、収量に対して追肥の影響が少なく多収で純米酒特性に優れていた。
- (8) 秋田米食味向上対策事業
炊飯米の外観形質である白さやつやは食味総合評価との関連性が高い。アミロースやタンパク質の含有率には至適濃度があると推定された。旨味成分と食味官能との関連性は認められなかった。
粒厚が大きいほど、玄米タンパク質含有率は低く、味度値は高く、食味評価も高かった。
- (9) 耐冷性といもち病抵抗性を兼ね備えた極良食味及び業務用米品種の開発と普及
(地独) 青森県農林総合研究所藤阪稲作部育成40系統及び宮城県古川農業試験場育成50系統の穂いもち抵抗性を判定した結果、極強は16系統、強は4系統であった。
- (10) 秋田ブランド野菜産地拡大・強化を目指したオリジナル品種の育成
野菜では、9月中旬に収穫できる良食味・多収・大莢で青豆タイプ（白毛）のエダマメ新品種「あきたほのか」を育成し品種登録申請した。ネギ7系統（夏どり系2、なべ用系1、晩抽系4）、スイカ3系統（種なし系1、小玉系2）、メロン2系統（アールス春系1、アールス夏系1）について、現地試験を実施した。
- (11) 秋田ブランド花きを目指す新品種育成

花きでは、トルコギキョウ「こまちホワイトドレス」のシリーズ化として、緑色花色の「こまちグリーンドレス」を品種登録申請した。また、シンテッポウユリについては葉枯れ病に強い系統は選抜できなかったが、新たに無花粉系統を選抜した。

【普及事項】黄緑色の八重咲きトルコギキョウ新品種「こまちグリーンドレス」

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	主要農作物奨励品種決定調査(H23～25)
2	奨励品種候補の普及適応性調査(H23～25)
3	第3期次世代銘柄米品種の開発(H22～26)
4	地球温暖化に対応した水稻品種の開発と栽培技術の確立(H23～27)
5	水稻直播用品種と高品質加工用米品種の開発(H20～24)
6	新規澱粉米品種の育成(H22～26)
7	地域で流通する加工用米を用いたトレーサビリティ清酒「まるごと秋田清酒」の開発(H24～25)
8	秋田米食味向上対策事業(H24～26)
9	耐冷性といもち病抵抗性を兼ね備えた極良食味及び業務用米品種の開発と普及(H23～25)
10	秋田ブランド野菜の産地拡大・強化を目指したオリジナル品種の育成(H22～26)
11	秋田ブランド花きを目指す新品種育成(H22～26)

4. 課題・今後の方針

- (1)・(2)・(3) 継続
- (4) 高温登熟耐性検定施設を利用した選抜を続ける。
- (5)・(7) 加工用米「秋田107号」は、多収穫で酒造特性が高いことから、平成25年9月に品種登録を出願した。それ以外の水稻関係の品種開発は継続する。
- (6) 戻し交配及び選抜を行う。
- (8) 良食味品種育成に有効な内部品質の検討及び食味向上栽培管理技術の検討を行う。
- (9) 継続
- (10) 野菜(エダマメ、ネギ、スイカ、メロン、イチゴ)では、引き続きそれぞれの用途に適応した品種の育成を進める。
- (11) 花きでは、トルコギキョウについて引き続き花色のシリーズ化を目指す。シンテッポウユリについて早期に品種育成を図るため、特性調査を重点的に行い選抜を強化する。

重点テーマ⑦：他場所育成品種の地域適応性検定

独法や種苗会社で育成された大豆、麦、野菜、花きの品種系統について、地球温暖化も視野に入れた栽培適応性を検討する。特に大豆については「リュウホウ」に代わる品種の選定を継続的に行う。

1. H24年度取組内容

(1) あきたの大豆生産力倍増支援事業

大豆では、(独)農研機構で育成された系統について県内での適応性を調査し、奨励品種の選定を行うとともに、有望系統の現地試料の加工適性を評価する。

(2) 主要農作物奨励品種決定調査(再掲)

麦類では、(独)農研機構で育成された系統について県内での適応性を調査し奨励品種の選定を行う。

(3) 野菜の育成系統評価試験

(独)農研機構で育成されたイチゴ系統の北東北日本海地域における適応性を検討する。

(4) リンドウ・ダリア全国トップブランド産地育成事業

リンドウ・ダリア全国トップブランド事業でダリアNAMAHAGEシリーズの候補系統の特性調査を行い、栽培特性を把握し、生産者の栽培資料に活用する。

2. 成果

(1) 大豆では、有望系統の「タチユタカ」並みの晩生・中粒・豆腐用の「東北171号」、「リュウホウ」並みの中生・小粒で納豆用「東北172号」を選定した。有望系統の晩生・中粒「東北171号」、中生・小粒「刈系841号(東北172号)」の豆腐加工適性・納豆加工適性試験を実施するとともに、食味特性について明らかにした。

(2) 麦類では、小麦「東北225号」を有望系統として選定した。

(3) 野菜では、イチゴ「盛岡35号」(3年目)について適応性を検討した結果、標準品種の「北の輝」に比べ、果実はやや軟らかいものの、商品果収量、1果重、商品果率が優れ、種浮き果、裂果が少ないことから、総合評価は「優」、普及性は「有望」と判断した。

(4) 花きでは、ダリアNAMAHAGEシリーズ5品種の栽培特性を把握し、生産現場にフィードバックした。

3. 【実施した研究課題・事業等】

	研究課題・事業等の名称
1	あきたの大豆生産力倍増支援事業 (H24～28)
2	主要農作物奨励品種決定調査(S23～25) (再掲)
3	野菜の育成系統評価試験 (H23～25)
4	リンドウ・ダリア全国トップブランド産地育成事業 (H23～25)

4. 課題・今後の方針

・当場でカバーできない品種については、引き続き(独)農研機構や民間育成系統の県内適応性を調査していく。

基本方針Ⅳ．マーケティングの推進と生産組織への支援による経営基盤の強化

農業者の経営基盤を強化するため、多様化するニーズに対応する農産物の生産・販売方策の研究、産地の維持・拡大に向けた体系の研究、集落営農組織における発展可能性の研究に取り組む。

重点テーマ⑧：需要に対応した生産体制の確立

市場・消費動向の変化やニーズに対応した生産体制の確立に向けて、マーケティング関連課題を重要課題として取り上げる。

青果物マーケットの動向予測として、量的規模の大きい低価格志向と、量的規模が小さい高品質高単価志向の二極分化が指摘される。産地としては、高品質高単価への対応と、規模の経済性を活かした低コスト生産による対応が必要であり、これらへの対応策を解明していく。

品種開発から販売にいたる各段階へのマーケティング視点の導入は、農業、果樹、畜産の各分野における生産・販売方策の研究として、各試験場との連携・協力により検討を進める。具体的には、新品種・新商品開発や新技術により生産される製品のマーケティングリサーチなどを実施し、育種や商品・技術開発へのフィードバックを行っていく。

1. H24年度取組内容

(1) 次世代秋田型水田農業モデルの開発

県外の大規模稲作経営体の運営実態と、主要コメ輸出国の動向を調査する。

(2) 市町村等との協働による新ビジネス研究事業（業務用キャベツの生産体制の確立）

業務用キャベツの新作型の導入効果を調査する。

(3) 成熟市場下のフードサービス業バイヤーに関する研究

ローカルフードサービスチェーンにおける農業参入の実態と課題を明らかにする。

2. 成果

(1) 大規模経営体において主体となる水稻栽培法は移植で、品種や栽培法の組み合わせや適期作業が行われていること、多角化の取り組みにはコメ加工品製造や直売所等に取り組んでいることを明らかにした。またアメリカとベトナムにおいて、日本のコメと同様の短粒種を生産する条件は価格プレミアムの存在であり、条件次第では輸出向け短粒種を増産する可能性があることを明らかにした。

(2) キャベツの8～9月どりは、既存の10～11月どりに比べ、収益性はやや劣るものの、経営体の規模拡大の手段として有効であることを明らかにした。

(3) フードサービス業の農業参入では、参入企業の7割が全国規模に展開するナショナルチェーンと大手企業の外食部門によるものであった。

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	次世代秋田型水田農業モデルの開発（H24～25）
2	市町村等との協働による新ビジネス研究事業（業務用キャベツの生産体制の確立）（H24～25）
3	成熟市場下のフードサービス業バイヤーに関する研究（H24～26）

4. 課題・今後の方針

継続検討する。

重点テーマ⑨：集落営農組織の維持・発展可能性の解明

多様な担い手の確保という観点から、農業法人等組織経営体が地域農業に果たす役割は重要であり、経営継続性・発展性を考えると、円滑な世代交代のためのリーダー育成やシステム構築、ぐるみ型からオペレータ型、株式会社化など会社形態の変更、通年雇用化など後継者を育成しやすい環境整備は重要課題として検討していく。

また、単一組織にこだわらない視点で、組織間連携・協力などの地域ネットワークを構築し、地域の経営資源を共有しながら経営の発展性、継続性を確保していく事も併せて検討していく。

さらに地域生産額の向上を目的とした複合化、多角化など多様な取組を推進していく上で、それぞれの課題・問題点を明確化し、生産原価・生産効率を把握しながら価格設定・価格交渉など対外交渉力の強い経営体へ育成を目指す。

1. H24年度取組内容

(1) 農業経営の継承・人材育成プロセスの解明及び支援手法の開発

県内の集落型農業法人における経営継承の状況を調査するとともに、県内の農業高校生の雇用就農に関する意識を調査する。

(2) 財務諸表を活用した農業法人の経営指導方法の確立

財務諸表分析から経営体の動向をとらえ法人化の効果や課題、行政が支援すべき事柄を明らかにする。

2. 成果

(1) 農業経営の継承・人材育成プロセスの解明及び支援手法の開発

県内の集落型農業法人のうち、経営継承者が決定しているのは21.2%にとどまっている。経営継承者が未決定の法人では、今後の対応として「構成員以外の従業員へ継承する」が最も多く、一方で「法人を清算して個別経営に戻る」との回答もあり、円滑な経営継承が、集落営農の持続的発展のために早急に検討すべき課題であることを明らかにした。

また、県内の農業高校生において、農業法人への就業に肯定的な層（25.2%）が存在している。今後、農業法人が有益な人材を確保するためには、積極的な情報の提供とインターンシップの受入条件整備が求められることを明らかにした。

(2) 財務諸表を活用した農業法人の経営指導方法の確立

年度後半から財務諸表の提供や調査に協力可能な法人の選定及び財務諸表の収集を行った。

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	農業経営の継承・人材育成プロセスの解明及び支援手法の開発（H24～25）
2	財務諸表を活用した農業法人の経営指導方法の確立（H24～26）

4. 課題・今後の方針

県単研究課題「農業経営の継承・人材育成プロセスの解明及び支援手法の開発」（H24-25）で、農業法人における経営継承の状況と雇用型就農の実態について継続検討する。

基本方針Ⅴ．水田をフル活用する栽培技術の開発

県内の水田ほ場はグライ土壌が多く、地形・土壌生成的な排水不良要因に加え、大区画水田ほ場では難透水の耕盤層の形成による停滞水型の排水不良も多くみられ、これら水田ほ場の生産力を最大限に発揮させ、農産物の産出額を持続的に拡大していくために、地下かんがいシステムを利用した栽培技術開発や水稲、畑作物、野菜および花きを組み合わせた持続的な農業生産技術の開発に取り組む。

重点テーマ⑩：水田の生産力向上技術の確立

地下かんがいシステムが導入可能な土壌条件、施工条件を検討する。さらに地下かんがいシステムを利用した持続的な複合経営の農業生産技術を確立する。

水稲では、無代かき直播など低コスト栽培技術開発を行い、後作の大豆では無代かきによる畑地化促進効果を活用した無培土栽培技術を開発する。これらの省力・省エネ作業技術による水田輪作技術を確立する。また、田畑輪換に伴う草種に対しては新たな雑草防除技術を確立する。

1. H24年度取組内容

- (1) 排水不良転換畑における緑肥植物と籾殻補助暗渠による大豆・エダマメ多収技術の確立

グライ土における籾殻補助暗渠とヘアリーベッチの組み合わせが土壌物理環境、エダマメの生育・収量・品質に及ぼす影響を明らかにする。

2. 成果

- (1) 地下かんがい設備と籾殻補助暗渠を敷設した転換初年目のほ場において、畝立て栽培がエダマメに及ぼす効果を検討し、籾殻補助暗渠を施行したほ場においても、グライ層の出現位置が浅いほ場では、エダマメの商品収量が低下する傾向がみられた。

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	排水不良転換畑における緑肥植物と籾殻補助暗渠による大豆・エダマメ多収技術の確立(H24～26)

4. 課題・今後の方針

地下かんがい設備と籾殻補助暗渠を敷設した排水不良の重粘土水田において、引き続き籾殻補助暗渠とヘアリーベッチの組み合わせが土壌の理化学性及びエダマメの生育、収量に及ぼす影響を明らかにする。

また、水稲・大豆では、地下かんがいシステムを利用した持続的な複合経営の農業生産技術を確立する。

さらに、これらの土壌の物理性及び化学性についての変化を調査していく。

基本方針Ⅵ. 栽培技術の開発による秋田ブランドの確立

水稲、畑作物、野菜および花きについて高品質生産技術や作期拡大技術を開発し、「秋田ブランド」の確立を目指す。「秋田の顔となる野菜・花き」を創出しうる、省力・省エネ技術、高品質・多収栽培技術、周年生産技術を土地利用型作物、労働集約型作物双方に関して開発する。

重点テーマ⑩：気象要因の解明による安定生産技術の確立

水稲、大豆等の栽培について継続的な調査によって気象条件と生育の特徴を解析し、適切な管理技術を作況ニュース等で情報発信する。

水稲では、地球温暖化に伴う冷害軽減技術・高温登熟時の高品質生産技術を確立して、「あきたこまち」をはじめとする主要品種の品質安定化を図り、秋田米のブランド力を強化する。

大豆では、温暖化に伴ない汚粒・減収の原因となるアメリカサガオ等難防除帰化雑草の侵入が懸念されるため、その防除技術を確立して高品質安定生産を図る。

1. H24年度取組内容

- (1) 水稲、大豆等の栽培について継続的な調査によって気象条件と生育の特徴を解析し、適期技術を作況ニュース等で情報発信する。
- (2) 地球温暖化の進行により、高温登熟時の高品質生産技術を検討する。
- (3) 大豆では、難防除帰化雑草の侵入調査を行う。

2. 成果

- (1) 水稲生育期間中の平均気温は7月まで平年並、以降は高かった。農試作況ほどは平年に比べ穂数はやや多く、一穂粒数は少なく、㎡当り全粒数はやや少なかった。収量は56.6kg/aで、玄米品質は良好であった。大豆標播（5月下旬）の「リュウホウ」は、出芽から苗立ち、開花期は平年並みであった。主茎長は長く、前半の生育は旺盛に進んだが、開花期以降の小雨により分枝数は平年並みになった。収量は整粒割合の低下により少なくなった。小麦は平年に比べ、出穂期、成熟期は遅く、収量はやや多く、外観品質が優れていた。
- (2) 地球温暖化による高温登熟対策として、水稲の育苗箱全量施肥と栽植密度の組み合わせにより、シグモイド溶出型被覆肥料を主体とした側条施肥により、高品質な玄米を省力減肥により得られることを明らかにした。大豆では、異常高温年の減収や品質低下の要因について明らかにした。
- (3) 大豆畑におけるアメリカサガオ等難防除帰化雑草の侵入状況について、関係機関、県立大学とともに調査を行い、県内での発生実態について明らかにした。

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	秋田米技術革新促進対策事業(H23～25)
2	地球温暖化に対応した水稲品種の開発と栽培技術の確立（H23～27）（再掲）

4. 課題・今後の方針

(1)・(2)とも継続

重点テーマ⑫：転作畑における野菜の高品質生産技術の確立

現在設立されている農事法人や営農組織は、地域・集落から任された農地の効率的な経営が求められている。このため、水田転作率が高まる中、転作畑の有効利用は組織にとって重要な課題となっている。そこで、これらの組織を支援するため、エダマメやネギなど転作畑での栽培に適する作物を対象にして、秋田の気象を活かした新作型開発、排水不良対策技術確立、機械化による生産性向上技術確立を図り、大規模露地野菜生産を振興する。また、本県で生産が少ない露地冬期野菜の生産拡大技術を確立する。

1. H24年度取組内容

- (1) 「秋田の顔となる野菜」の生産拡大を目指した新技術の開発
 - 1) キャベツでは、長期出荷のための新しい作型を開発する。
 - 2) ネギでは、夏どり作型を開発する。
 - 3) アスパラガスでは、休眠特性の解明による11月出荷が可能な栽培技術を開発する。
 - 4) 県オリジナル品種では、「秋農試40号(エダマメ)」の栽培特性を解明する。
- (2) えだまめ日本一総合推進事業
育成中のえだまめの市場評価調査を行う。
- (3) 市町村等協働による新ビジネス研究事業（業務用キャベツの生産体制の確立）
低コスト、省力、安定供給を目的に転換畑業務用キャベツ栽培における畝立てと同時に施肥を行う畝内条施肥の効果を検討する。
- (4) 市町村等協働による新ビジネス研究事業（ネギの昨期拡大）
ネギのセル大苗を利用したハウス越冬無加温育苗による7月どり栽培における抽だい率等から適品種を選定する。
- (5) 表層細土畝立て同時マルチ播種機を利用したエダマメ栽培
耕起、畝立て、マルチ、播種、同時作業機を用いて、早期から安定的に出荷できるエダマメの播種技術の開発を行う。
- (6) 耐塩性の強いアスパラガスの導入と安定生産
東北農研、宮城農園研との共同で、津波被害地において耐塩性の強いアスパラガスの栽培法を確立する。

2. 成果

- (1) 「秋田の顔となる野菜」の生産拡大を目指した新技術の開発
 - 1) キャベツでは、有孔緑マルチと融雪後の不織布被覆を組み合わせると、春～初夏どりの収穫が早まり、10月上旬定植で5月中旬～6月初旬収穫が可能であった。また、無加温ハウスを利用した越冬栽培により4～5月収穫が可能な作型を開発した。この作型では、品種は「金春」または「春波」が適した。

【参考事項】有孔緑マルチと不織布の併用により春～初夏どりキャベツの収穫が早まる

【参考事項】無加温ハウスによるキャベツの越冬4～5月収穫

- 2) ネギでは、ハウス越冬無加温育苗時の換気管理として、秋冬期では換気開始温度が10℃程度、冬春期では、12.

5℃以上の換気開始温度が適していた。県内陸部において本技術体系の現地実証を行い導入効果を確認した。半自動移植機の適応試験により、2条千鳥植えと3.5cm株間の増収効果を明らかにした。

3) アスパラガス促成作型では、早期出荷のための掘り上げ時期と冷蔵処理条件について、及び1年半株養成方法のための育苗条件を明らかにした。早期出荷では、11月出荷には10月上旬に掘り上げ、12月出荷には10月下旬に掘り上げ、各5℃で2～3週間処理が適していた。1年半株養成方法では、定植は9月上旬頃まで、育苗容器は128穴セルが適していた。

4) 県オリジナル品種では、「秋農試40号(エダマメ)」の播種適期は6月5日～6月20日、開花から収穫始期までの日数49日、積算気温は1,123℃であることを明らかにした。

(2) えだまめ日本一総合推進事業

京浜及び大阪地域において「秋試16号」の市場調査を行った結果、大莢で外観が優れており、味も「錦秋」より評価が高かった。

(3) 市町村等協働による新ビジネス研究事業（業務用キャベツの生産体制の確立）

畝内条施肥機は作業速度0.44m/sで設定通りの畝成形と畝内条施肥が可能であったが、施肥量が想定より少なかったことから収穫期の畝内条施肥区の結球重は、1.54kgで慣行区よりやや小さく、効果のあることを確認した。

(4) 市町村等協働による新ビジネス研究事業（ネギの昨期拡大）

能代市や場内で試験結果から、「夏扇パワー」が収量性、在ほ性において優れていた。また「夏扇4号」も優れていた。

(5) 表層細土畝立て同時マルチ播種機を利用したエダマメ栽培

現地播種作業（手作業）の作業能率(2人作業)は、3.55h/10aで、OWAS法の作業姿勢評価はAC3（この姿勢は筋骨格系に有害）、AC4（この姿勢は筋骨格系に非常に有害）の割合がそれぞれ49%、44%と高いことを明らかにした。本播種機の作業速度は概ね0.08m/sで、マルチングによる作期前進効果は1～2日であるが、生育量（主茎長・分枝数等）の増加により商品収量は慣行の2倍に増えた。

(6) 耐塩性の強いアスパラガスの導入と安定生産

秋の掘り上げ株重は平畝マルチ区が高畝区に比べて重かったが、いずれの区も十分な生育量が確保された。平畝区は降雨による湿害を受けやすい。

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	「秋田の顔となる野菜」の生産拡大を目指した新技術の開発(H21～25)
2	えだまめ日本一総合推進事業(H23～25)
3	市町村等協働による新ビジネス研究事業（業務用キャベツの生産体制の確立）（再掲）(H24～25)
4	市町村等協働による新ビジネス研究事業（ネギの作期拡大）(H23～24)
5	表層細土畝立て同時マルチ播種機を利用したエダマメ栽培(H23～25)
6	耐塩性の強いアスパラガスの導入と安定生産(H24～27)

4. 課題・今後の方針

(1) 「秋田の顔となる野菜」の生産拡大を目指した新技術の開発を行う。

1) キャベツでは、業務需要向けの8～9月及び10～11月収穫に適する品種を選定する。

- 2) ネギでは、最も普及しているチェーンポット育苗を改良し、無加温育苗での長期出荷確立に努める。
- 3) アスパラガスでは、長期どり作型において改植に伴う収穫期間の空白を少なくする技術開発を行う。
- (2) えだまめの剥き実を利用した加工品の市場可能性を検討する。
- (3) 転換畑業務用キャベツ栽培における畝立てと同時に施肥を行う畝内条施肥の効果を検討する。
- (4) 引き続き7月どりに適した品種選定を場内で行う。
- (5) 現地実証試験を行う。
- (6) 高畝栽培による生育特性と大苗定植による収穫の早期化を検討する。

重点テーマ⑬：省力・省資源型栽培技術の確立

水稲について、直播、疎植、減肥、「あきたecoらいす」等のより一層の低コスト、省力栽培技術の確立を図る。

トマトなど施設野菜については、少量培土栽培、簡易養液土耕栽培など省力・省エネ技術を開発し、高品質・安定栽培技術を確立する。

花きは、変温管理による暖房費用の削減やLED等の波長制御可能な人工光源を用いた生育・開花調節による作型開発と高品質生産技術開発などを行い、省資源型栽培技術を確立する。

1. H24年度取組内容

(1) 秋田米技術革新促進対策事業

水稲直播種による低コスト、省力栽培技術について検討するとともに、高精度点播機を用いて湛水直播栽培を検討する。また気象変動に対応可能な栽培技術を実証する。

(2) 省力技術を活用した高品質米の安定生産技術の確立

疎植栽培における高品質米生産のための分けつ確保技術及び肥効調節型肥料利用技術の検討を行う。

(3) ほ場均平作業におけるセミクローラトラクタの作業効率調査

セミクローラトラクタを用いたレーザ均平作業の作業能率等を調査し、ほ場均平作業への適応性や燃料消費に及ぼす影響を検討する。

(4) 秋田の顔となる野菜の生産拡大を目指した新技術の開発

高糖度トマトの根域制限栽培技術を開発するとともに、省力化のための灌水制御器を開発する。またイチゴでは夏秋期に大果で果実形質に優れた四季成り性品種を選定する。

(5) 省資源型花き栽培に対応した生産拡大技術の開発

暖房費削減に関する課題として、トルコギキョウにおいてはカーボン資材や遠赤色LED電球を用いて検討する。省電力化に対応する課題としてはLED電球の利用方法について、キクやダリアの電照栽培において検討する。

(6) 副生グリセリンを活用する暖房機を組み合わせた秋冬期の寒冷地省エネ花き生産技術確立

キクを対象に複生グリセリン暖房機を組み合わせた変温管理技術の検討及び現地実証を行う。

2. 成果

(1) 湛水直播栽培における肥効調節型肥料の側条施肥が良食味米生産に有効であることを実証した。また、土中播種、表面播種の両様式ともに1.37m/s程度の作業速度で点播可能であり、点播形状は表面播種が良好であることを確認した。

また、育苗箱全量施肥と密植を組み合わせた無効分けつ抑制栽培は、高温登熟条件下においても白未熟粒の発生が少なかった。

【普及事項】 シグモイド溶出型被覆肥料を主体とした側条施肥の窒素肥料と省力減肥効果

【参考事項】 水稻の育苗箱全量施肥と密植を組み合わせた無効分げつ抑制栽培による白未熟粒の発生軽減

- (2) 高品質米の安定生産のためには、6月25日までに発生する分げつを主体に確保すること、50株/坪栽培では肥効調節型肥料を側条施肥すると登熟期間中の葉色も維持され、収量も確保された。
- (3) セミクローラはフルクローラより低出力で、レベラの作業幅が小さいにもかかわらず、作業時間が短かく、ほ場均平作業への適応性があり、燃料消費も少ないことを明らかにした。
- (4) トマトにおいて開発した2層栽培法で2本仕立て栽培により、目標収量の1.5kgに到達する可能性を確認した。試作した灌水制御器は、測定日射量が全天日射量に比べて1.14倍大きく、改善が必要であった。トマトの地床栽培では、灌水制御器による日射比例間断灌水と定量灌水の果実収量はほぼ同等であることを明らかにした。
夏秋どりイチゴ品種として、1果重が11gを超える大果で果実硬度が高く、果実外観にすぐれ多収品種である、四季成り性品種Portola（ポルトラス）を選定した。

【普及事項】 大果・多収の夏秋どり栽培用イチゴ品種「Portola」

- (5) トルコギキョウにおけるカーボン資材の暖房効果については、カーボンヒーター、カーボンフィルムにおいて確認したが、カーボンロープにおいては効果を確認できなかった。
キクの花芽分化抑制効果は、赤色LEDと白色LEDは同等の効果があった。トルコギキョウにおいて、遠赤色LEDで伸長促進効果があった。ダリアにおいて、赤色LEDは発熱電球と同等の露心花防止効果があることを明らかにした。
- (6) キク抑制栽培におけるEOD技術は、35%程度の燃料費節減効果が確認された。今後は副生グリセリンを燃料とした開発暖房機のなる燃料効率向上に向けた改良が必要である。

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	秋田米技術革新促進対策事業（再掲）(H23～25)
2	省力技術を活用した高品質米の安定生産技術の確立(H22～26)
3	ほ場均平作業におけるセミクローラトラクタの作業効率調査(H24～25)
4	秋田の顔となる野菜の生産拡大を目指した新技術の開発（再掲）(H21～25)
5	省資源型花き栽培に対応した生産拡大技術の開発(H22～26)
6	副生グリセリンを活用する暖房機を組み合わせた秋冬期の寒冷地省エネ花き生産技術確立(H22～24)

4. 課題・今後の方針

- (1) 高精度点播機を用いて湛水直播栽培を検討する。
- (2) 肥効調節型肥料と堆肥の組み合わせによる直播栽培の減化学肥料栽培を検討する。
- (3) セミクローラトラクタを用いたレーザ均平作業能率、ほ場均平作業への適応性や燃料消費についてフルクローラトラクタと比較検討する。
- (4) 高糖度トマトにおいて装置の市販化と長期栽培可能な技術開発を行う。また、トマト根域制限栽培への灌水制御器の活用を試みる。イチゴの「Portola」については、産地での普及定着を図る。
- (5) 花きでは、キクについて平成25年度に赤色と遠赤色の混合色LED電球について適切な混合割合を産学官連携事業により検討する。
- (6) 試験課題は完了した。

基本方針Ⅶ. 優良種苗の増殖供給

「主要農作物種子法」において、都道府県は主要農作物（水稲、麦、大豆）の優良な種子の生産を行うために必要な原原種、原種の生産を行うと定められている。このため、主要農作物の優良種子生産と普及を促進し、生産性の向上および品質の改善を図ることを目的に、本県で採用されている奨励・認定品種について、原原種と原種の生産を行う。

また、野菜・花き生産の振興をはかるために、育成された県オリジナル品種について栽培農家に普及配布し、生産および流通の評価をしてもらい、新品種の速やかな定着とオリジナル品種産地拡大を図るため、普及配布用種苗の増殖と母本維持管理の原原種と原種の生産を行う。

重点テーマ⑭：主要農作物の原原種と原種の安定生産

水稲では「あきたこまち」、麦では「ネバリゴシ」、大豆では「リュウホウ」をはじめとする主要農作物の奨励・認定品種の原原種と原種の生産を行う。

今後、さらなる種子生産の安定化をはかるため、種子保管体制整備などにより生産リスクの軽減を図る。

また、原種生産の効率化を図るため、東北各県間における原種生産協力体制の構築について検討する。

1. H24年度取組内容

- (1) 主要農作物種子生産計画検討会での秋田県種子生産計画（種子計画）に基づき、水稲、麦、大豆の奨励品種と認定品種の原原種及び原種を生産し、原原種は原種に、原種は採種ほに種子供給する。
- (2) 原原種、原種の安定生産のため、ほ場排水対策を講じるとともに、安定供給のため主力品種の備蓄体制を整備する。
- (3) 「東北六県主要農作物原種原原種生産に係わる情報交換会」を秋田県で開催する。

2. 成果

- (1) 水稲原原種は粳米3品種、酒造好適米1品種の計4品種、原種は粳米2品種、糯1品種、新規需要米1品種、酒造好適米1品種計5品種を種子計画のとおり生産し、供給した。
麦では、原原種1品種を種子計画の通り生産・供給した。原種では湿害による減収があったが、種子計画のとおり供給した。
大豆では、土壌伝染性病害の発生が拡大傾向により減収したものの、原原種2品種、原種2品種を種子計画のとおり供給した。
- (2) 大豆の土壌伝染性病害対策として、原原種畑ほ場（農試）6筆のうち3筆の既存暗渠の修繕を実施した。原種ほ場（農業公社）では、暗渠や籾殻補助暗渠の施工によるほ場排水性の改善に加え、大豆・麦1作一水稲3作の作付け体系に変更し、水田化による土壌浄化を開始した。また、大豆主力品種「リュウホウ」の原種を安定供給するため、1カ年分の備蓄を確保し、保管原種による供給体制を整備した。
- (3) 「東北六県主要農作物原種・原原種生産に係わる情報交換会」を平成24年7月19日、20日に秋田農試で主催し、東北六県と新潟県からの参加者による情報交換を行った。

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	主要農作物種子対策事業 (S23～25)

4. 課題・今後の方針

- (1) 水稻奨励2品種採用と平成26年度奨励品種除外予定2品種の原原種・原種の生産と供給を円滑に進める。
- (2) 大豆原原種・原種ほ場の土壌伝染性病害対策を継続実施する。

重点テーマ⑮：野菜等種苗の安定生産

農業試験場で育成した園芸新品種の種苗増殖を図り、普及提供の資とする。普及した品種については維持管理用の原原種・原種生産を行う。

1. 取組内容

農業試験場で育成した野菜等新品種の種苗の安定供給のため、原原種及びF1親種子の生産と維持管理を行うとともに、原種及びF1親苗の生産と許諾先への供給を行う。

2. 成果

- (1) エダマメ：種子生産では、原種は「あきた香り五葉」280kg、「あきたさやか」400kg、原原種は「あきたさやか」6.1kg、「秋試16号」13.8kg、販売用種子は「秋試16号」17kgを生産した。また、原種の種子供給では「あきたさやか」80kg、「あきた香り五葉」90kg、「秋農試40号」32kgを許諾先へ販売した。
- (2) スイカ：「秋農試38号」のF1種子18,000粒を生産した。また、「あきた夏丸」のF1親苗（♂40株、♀200株）、「秋農試38号」のF1種子10,000粒及び「あきたシャリン娘」のF1種子1,000粒を許諾先に販売した。
- (3) メロン：「秋田甘えんぼレッド」及び「秋田甘えんぼレッド春系」のF1親苗をそれぞれ、♂15株と♀80株、「こまちクイーン」のF1種子1,500粒を許諾先に販売した。
- (4) ダイコン：「秋農試39号」のF1種子を110kg生産し、内80kgを2業者へ販売した。
- (5) 辛味ダイコン：「あきたおにしぼり」のF1種子を4.3kg生産し、F1種子4.3kgと、親2系統の種子各45mlを、許諾先に販売した。
- (6) フキ：「こまち笠」の増殖用苗150株を生産し、許諾先に販売した。

※「秋試16号」は「あきたほのか」として、平成24年12月27日品種登録出願済みである。

3. 実施した研究課題・事業等

	研究課題・事業等の名称
1	種苗増殖供給円滑化事業 (H22～24)

4. 課題・今後の方針

- ・ 県育成野菜品種の原原種・F1親苗等の生産については、引き続き農業試験場が担当するとともに、一般供給種子の生産は許諾先と連携をとりながら優良種子の提供に努めていく。

3. 一 般 報 告

I. 所在地と規模	
1. 所在地	26
2. 規 模	26
(1) 面 積	
(2) 建 物	
II. 事業予算	26
III. 機構と職員	
1. 機 構	27
2. 職員数	28
IV. 業務分担と各種委員会等	
1. 業務分担	29
2. 各種委員会	31
V. 職員の異動	32
VI. 主要行事と研修等	
1. 主要行事	34
2. 研 修	37
3. 主な技術協力	
(1) 委員応嘱	40
(2) 講師派遣	44
VII. 成果の発表	
1. 試験研究の概要	48
2. 学会・研究発表会	50
3. 学会誌・研究会誌の投稿	53
4. 新聞・雑誌の投稿・記事	
(1) 新聞関連	56
(2) 著書	57
(3) 雑誌関連	58
5. 研究資料	59
6. 表彰	61
7. 特許・登録等	62
8. 学位取得	65
9. 視察・見学	66

I. 所在地と規模

1. 所在地

本 場 〒010-1231 秋田市雄和相川字源八沢34番地1
 電話 018(881)3330 FAX 018(881)3301

大 潟 農 場 〒010-0442 南秋田郡大潟村東1丁目1番地
 電話 0185(45)2011 FAX 0185(22)4008

2. 規 模

(1) 面 積

(単位:ha)

区 分	本 場	大 潟 農 場
ほ 場	26.0	5.0
建物敷地	24.0	—
計	50.0	5.0

(2) 建 物

(単位:m²,棟)

区 分	本 場	大 潟 農 場
本 館	9,616	632
講 堂	715	—
炊・温室	36	—
付 属 舎	34	6

II. 事業予算

(単位:千円)

事 業 名	決算予定額 (H25.2.28 現在)	財 源 内 訳					
		使 用 料	国 庫 支 出 金	財 産 収 入	寄 付 金	諸 収 入	一 般 財 源
給 与 費	505,803						505,803
管 理 運 営 費	132,024	306		6,024		956	124,738
県 単 試 験 費	16,283		2,672				13,611
受 託 試 験 費	72,088		14,300			57,788	
施 設 設 備 整 備 費	3,741		1,475				2,266
計	729,939	306	18,447	6,024		58,744	646,418

Ⅲ. 機構と職員数

1. 機構

研究 : 4部11担当、1室1班
 企画・研究調整・広報・総務・管理 : 2室3班

		人数
農業試験場長		1
(1)	主席研究員	1
(1)	総務管理室	1
(19)	室長	6
	総務班	12
	管理班	
	企画経営室長	1
(8)	室長	3
	企画班	4
	経営班	
	作物部	1
(9)	部長	4
	作物栽培担当	4
	水稻育種担当	4
	原種生産部	
(6)	部長(場長が兼務)	4
	系統管理担当	2
	原種生産担当	
	野菜・花き部	1
(13)	部長	4
	野菜担当	3
	花き担当	5
	園芸育種・種苗担当	
	生産環境部	1
(15)	部長	3
	環境調和担当(大湊農場)	4
	土壌基盤担当	5
	病害虫担当	2
	機械作業担当	
		72名

2. 職員数

(兼務職員を除く)

	行政職		研究職	現業職		計
	事務吏員	技術吏員	技術吏員	運転技師	圃場業務	
(農業試験場) 場 長			1			1
(兼)原種生産部長			1			1
主 席 研 究 員 室	7	1		1	10	19
総 務 管 理 室		4	4			8
企 画 経 営 部			9			9
作 物 生 産 部			6			6
原 種 生 産 部		1	12			13
野 菜 ・ 花 き 部		1	13		1	15
生 産 環 境 部						
計	7	7	46	1	11	72

IV. 業務分担と各種委員会等

1. 業務分担

(平成24年4月1日現在)

部・グループ	担当	業務内容	職名	氏名
		場の総括 場長特命に関する事	場長 主席研究員	湯川 智行 吉尾 聖子
総務管理室		室の総括	室長	打川 富夫
	総務班	場の人事・サービス・予算・決算・物品・出納に関する事	主幹(兼)班長 副主幹 主査 主査 主事 技能技師	黒木 祥子 上村 直志 田原 隆雄 柴田 敏幸 渡辺 岳志 熊谷 洋平
	管理班	場の労務管理、圃場・農業機械及び庁舎の管理に関する事	副主幹 主任 技能主任 技能主任 技能主任 技能主任 技能主任 技能主任 技能主任 技能技師 技能技師 技能技師	花里 浩之 佐藤 智仁 高橋 善則 佐々木 文武 佐々木 景司 猿田 進 川井 涉 佐藤 敬亮 関 亘 菅原 達也 千田 敦 関口 一樹
企画経営室		室の総括	室長	松橋 秀男
	企画班	場内調整、研究の進行管理、関係機関との連絡調整、広報、視察、研修に関する事	上席主幹 (兼)班長 主幹 副主幹	田村 晃 石田 純士 辻 久信
	経営班	農業経営の研究に関する事	上席研究員 (兼)班長 主任研究員 主任研究員 研究員	高山 真幸 鶴沼 秀樹 上田 賢悦 齋藤 文信

部・グループ	担当	業務内容	職名	氏名
作物部		部の総括	部長	佐藤 雄幸
	作物栽培担当	水稲および畑作物の栽培、作況、奨励品種決定調査、除草剤に関すること	上席研究員 主任研究員 主任研究員 研究員	佐野 広伸 松本 眞一 三浦 恒子 松波 寿典
	水稲育種担当	水稲新品種の育成に関すること	主任研究員 主任研究員 研究員 研究員	小玉 郁子 川本 朋彦 加藤 和直 佐藤 健介
原種生産部		部の総括（場長が兼務）		
	系統管理担当	原原種生産、種子生産の指導に関すること	上席研究員 主任研究員 主任研究員 主任研究員	北川 悦子 佐藤 努 柴田 智 佐藤 馨
	原種生産担当	原種生産、種子生産の指導に関すること	主任研究員 研究員	田口 光雄 高橋 東
野菜・花き部		部の総括	部長	金 和裕
	野菜担当	メジャー・ブランド野菜の栽培に関すること	上席研究員 主任研究員 主任研究員 主任研究員	新井 正善 林 浩之 本庄 求 篠田 光江
	花き担当	花きの栽培、新品種育成に関すること	主任研究員 主任研究員 研究員	佐藤 孝夫 間藤 正美 山形 敦子
	園芸育種・種苗担当	野菜の新品種育成、系統適応性検定試験、野菜・花きの種苗増殖に関すること	上席研究員 主任研究員 主任研究員 主任研究員 技師	檜森 靖則 佐藤 友博 椿 信一 飛島 正人 三浦 一将
生産環境部		部の総括	部長	村上 章
	環境調和担当	閉鎖水系水田地帯の環境保全型栽培、八郎湖流域水田の原単位調査に関すること	主任研究員 技師 技能主任	伊藤 千春 渋谷 允 小杉 利幸

部・グループ	担当	業務内容	職名	氏名
生産環境部	土壌基盤担当	有機質資源の循環、土壌汚染防止対策、新肥料・資材の利用に関すること	主任研究員	武田 悟
			主任研究員	伊藤 正志
			主任研究員	石田 頼子
	機械技術担当	水稻・畑作物の農業機械、農作業技術、水稻直播栽培に関すること	主任研究員	進藤 勇人
			研究員	齊藤 雅憲
	病虫害担当	病虫害防除、新農薬実用化試験、農薬残留試験に関すること	主任研究員	佐山 玲
			主任研究員	山本 英樹
			主任研究員	菊池 英樹
			主任研究員	藤井 直哉
			研究員	高橋 良知

2. 各種委員会

種類	委員長	部・室	委員
ゼミ委員会	村上 章 部長	企画経営室 作物部 原種生産部 野菜・花き部 生産環境部	※辻久信副主幹 三浦恒子主任研究員 田口光雄主任研究員 山形敦子研究員 進藤勇人主任研究員
編集委員会	佐藤雄幸 部長	企画経営室企画班 // 経営班 作物部 原種生産部 野菜・花き部 生産環境部	※田村 晃上席主幹(兼)企画班長 高山真幸上席研究員 川本朋彦主任研究員 佐藤 馨主任研究員 新井正善上席研究員 佐山 玲主任研究員
参観デー委員会	松橋秀男 企画経営 室長	総務管理室 企画経営室 作物部 原種生産部 野菜・花き部 生産環境部	○打川富夫総務管理室長、黒木祥子主幹(兼)総務班長、 花里浩之副主幹(兼)管理班長、高橋善則技能主任 ※石田純土主幹 佐野広伸上席研究員、佐藤健介研究員 北川悦子上席研究員、佐藤 努主任研究員 金 和裕部長、林 浩之主任研究員 村上 章部長、武田 悟主任研究員、菊地英樹主任研究員

○は副委員長（参観デー委員会のみ）、※は事務局。

V. 職員の異動

(平成24年3月31日～25年3月31日)

発令年月日	事由	氏名	新所属・職名	旧所属・職名
24. 4. 1	転入	吉尾 聖子	農業試験場 主席研究員	イメージアップ戦略推進室政策監
		松橋 秀男	企画経営室長	農業研修センター所長
		打川 富夫	総務管理室長	農技セ総務管理室長
		黒木 祥子	総務管理室主幹	農技セ総務管理室主幹
		上村 直志	総務管理室副主幹	農技セ総務管理室副主幹
		柴田 敏幸	総務管理室主査	農技セ総務管理室主査
		高山 真幸	企画経営室上席研究員	農技セ企画経営室上席研究員
		鶴沼 秀樹	企画経営室主任研究員	農技セ企画経営室主任研究員
		上田 賢悦	企画経営室主任研究員	農技セ企画経営室主任研究員
		齋藤 文信	企画経営室研究員	農技セ企画経営室研究員
		佐野 広伸	作物部上席研究員	農技セ企画経営室副主幹(兼)班長
		高橋 東	原種生産部研究員	仙北地域振興局農林部主任
		渡辺 岳志	総務管理室主事	山本地域振興局総務企画部主事
		熊谷 洋平	総務管理室技能技師	山本地域振興局総務企画部技能技師
	新規採用	三浦 一将	野菜・花き部技師	
24. 3.31	転出	伊藤 征樹	農業研修センター主査	農技セ農業試験場
24. 4. 1	昇任	関 巨	総務管理室技能主任	企画管理部技能技師
		佐藤 敬亮	総務管理室技能主任	企画管理部技能技師
		小杉 利幸	生産環境部技能主任	生産環境部技能技師
24. 4. 1	場内異動	田村 晃 佐藤 努	企画経営室上席主幹(兼)企画班長 原種生産部主任研究員	原種生産部長 企画管理部副主幹

(平成24年3月31日～25年3月31日)

発令年月日	事由	氏名	新所属・職名	旧所属・職名
24. 6.30	退職	山本 英樹		生産環境部主任研究員
25. 3.31		打川 富夫		総務管理室長
25. 3.31		花里 浩之		総務管理室副主幹(兼)管理班長

※旧所属・職名の中で平成23年度で廃止された農業技術センターは農技セと略した。

また、農林水産技術センター農業試験場から農業試験場に発令されているが、実質担当が替わらないものはその表示を省略した。

VI. 主要行事と研修等

1. 主要行事

(1) 行事・会議

行事・会議	開催日	開催場所
未来農業のフロンティア育成研修開講式	24. 4. 4	農業研修センター
未来農業のフロンティア育成研修農試開講式	24. 4. 9	農業試験場 講堂
地域振興局農林部農業振興普及課長等会議	24. 4.18 ～19	県正庁 秋田総合庁舎会議室
地域振興局農林部長・地方機関長会議	24. 4.23	県正庁
農林水産関係試験研究機関場所長会議	24. 5.16	秋田総合庁舎会議室
食品産業振興連絡会議	24. 5.16	秋田総合庁舎会議室
全国農業関係試験研究場所長会	24. 6.22	つくば市
平成24年度水稻関係除草剤試験中間現地検討会	24. 6.28 ～29	大仙市、美郷町、農業試験場 秋田市 ホテルメトロポリタン秋田
職務育成品種審査会	24. 7. 2	秋田地方総合庁舎 第2・3会議室
秋田県総合政策審議会新農林水産ビジネス創出部会	24. 7. 2	ルポールみずほ
農業試験場試験研究成果発表会	24. 7. 3	農業試験場 講堂
研究運営協議会（サマーレビュー）	24. 7.26	農業試験場 講堂
未来農業のフロンティア育成研修中間報告会	25. 7.31	農業試験場 ほ場・大会議室他
水稻新品種名称知事説明	24. 8. 7	県庁 知事室
東北農業試験研究発表会	24. 8. 8	福島市 コラッセふくしま
日本作物学会東北支部会 現地研修	24. 8.21	農業試験場（高温登熟、耐冷性施設）
秋田県総合政策審議会新農林水産ビジネス創出部会	24. 8.22	農業試験場 中会議室
農業試験場参観デー	24. 8.31 ～9. 1	農業試験場
第135回秋田県種苗交換会農業功労者選考委員会	24. 9. 6	秋田県JAビル役員会議室
農業試験場研究課題評価委員会	24. 9. 6	秋田地方総合庁舎 第14会議室
「あきた米」販売戦略会議	24. 9. 7	農業試験場 中会議室
秋田県立大学・県農林水産関係公設試験場・県総合 食品研究センター研究推進協議会	24. 9.25	アキタパークホテル
東北農業関係試験研究場所長会	24. 9.27 ～28	岩手県花巻市他
ダリア切花生産者フォーラム	24.10. 5	秋田市雄和 ヴィラ・フローラ
県総合政策審議会第4回農林水産ビジネス創出部会	24.10.12	ふきみ会館
秋田県試験研究機関業務評価ヒアリング	24.10.17	県庁第2庁舎 高機能会議室
東北農業試験研究推進会議「研究戦略会議」	24.10.19	東北農研センター
東北地域研究・普及連絡会議・現地検討会	24.10.26	東北農研センター

行事・会議	開催日	開催場所
第135回秋田県種苗交換会開会式	24.10.31	能代市文化会館
農林水産部試験研究機関長会議	24.11. 1	秋田地方総合庁舎 第14会議室
男女共同参画統括推進員セミナー	24.11. 2	秋田地方総合庁舎 第14会議室
第135回秋田県種苗交換会褒賞授与・閉会式	24.11. 6	能代市文化会館
北東北3県農業試験場関係企画室長会議	24.11. 7	秋田地方総合庁舎 第11会議室
未来の農業を語る会	24.11.19 ～11.20	農業試験場 大会議室 自治研修所
未来農業フロンティア育成研修受入審査委員会	24.11.27	
職務育成品種審査会	24.12.20	秋田地方総合庁舎 第14会議室
秋田県立大学・農林水産関係試験場・総合食品研究センター連携シンポジウム	25. 1.24	総合食品研究センター
秋田米評価向上研修会	25. 1.29	秋田キャッスルホテル
秋田県政策評価委員会研究評価専門委員会	25. 1.30	県議会特別会議室
農林水産ビジネス推進フォーラム	25. 2. 1	秋田ビューホテル
第3回農林水産関係試験研究機関場所長会議	25. 2.13	県庁第2庁舎 31会議室
第2回食品産業振興連絡会議	25. 2.13	県庁第2庁舎 31会議室
農商工連携セミナー	25. 2.14	北都銀行ビルディング
未来農業のフロンティア育成研修成果発表会	25. 2.18	農業試験場 大会議室
東北農業試験研究協議会総会	25. 2.21	岩手県盛岡市 東北農研センター
東北農業試験研究推進協議会本会議	25. 2.21	岩手県盛岡市 東北農研センター
未来農業のフロンティア育成研修修了式	25. 2.28	県庁第2庁舎 大会議室
「あきた米」販売戦略会議	25. 3.12	ルポールみずほ
秋田県品種対策協議会	25. 3.12	ルポールみずほ
水稻育種目標検討会	25. 3.12	ルポールみずほ

(2) 場内会議・検討会

行事・会議	開催日	開催場所
定例場議・臨時場議	第1・3月曜日	農業試験場 場長室（年24回）
冬作成績・試験設計検討会	24. 9.18	農業試験場 中会議室
試験研究成果・成績検討会	24.11.19 ～25.1.22	農業試験場 中会議室
全場検討会	25. 1.23	農業試験場 大会議室
試験設計検討会	25. 2.13 ～ 3.13	農業試験場 中会議室

(3) セミナー

「演題」 講師	開催日	開催場所
「最新農林関係情報について」 日本大学 鳥越 洋一教授	24. 5. 2	農業試験場 大会議室
「水田転換畑での大豆安定多収栽培300Aプロの経験を踏まえて」 株式会社クボタ技術顧問 有原 丈二氏	24. 8. 1	農業試験場 講堂
「記念講演：これまでの県職員生活を振り返って」 農業試験場 総務管理室 打川 富夫 室長	25. 3. 1	農業試験場 大会議室
「農研機構依頼研究員派遣研修報告会」 農業試験場 生産環境部 齋藤 雅憲 研究員	25. 3. 1	農業試験場 大会議室
「花に見る日本農業の強みと弱み、技術開発の方向性を考える」 農研機構 花き研究所 福田 直子 上席研究員	25. 3. 8	農業試験場 大会議室
「大学院学位取得報告会」 農業試験場 作物部 小玉 郁子 主任研究員	25. 3.11	農業試験場 大会議室
「大学院学位取得報告会」 農業試験場 作物部 三浦 恒子 主任研究員	25. 3.11	農業試験場 大会議室
「食と農に関わる女性研究者として思うこと」 農研機構 食品総合研究所 矢部 希見子 食品バイオテクノロジー研究領域長	25. 3.22	農業試験場 大会議室

2. 研修

(1) 未来農業のフロンティア育成研修

期生	研修者氏名	市町村	コース	研修内容（プロジェクト課題名）
2年生	佐藤 迪哉	鹿角市	作物	直播栽培であきたecoらいすによる低コストな病害虫防除技術の習得
	佐藤慎太郎	大湯村	作物	水稲糯品種「たつこもち」の高品質安定生産技術の検討
	斎藤 慎平	由利本荘市	作物	地域名産品ソバの収量と品質向上のための牛糞完熟堆肥の施用量の検討
	齊藤 拓	大仙市	作物	水稲湛水直播栽培における播種量を削減した「あきたecoらいす」への挑戦
	福岡 佑馬	横手市	野菜	長ネギの作期の違いによる生育量の把握と栽培マニュアルの作成
	石原 正博	大湯村	野菜	ビニールハウスを利用した秋冬ネギ栽培
	高森 大貴	大湯村	野菜	オクラ露地栽培技術の習得
	阿部 宏平	にかほ市	花き	ひまわりの施肥量の違いが切り花品質に及ぼす影響について
	田村 智宏	大仙市	花き	キク栽培における籾殻くん炭と菌液の施用が生育に与える影響
1年生	佐々木 藍奈	秋田市	作物	
	鈴木 秀征	秋田市	作物	
	埴生 雄大	大湯村	作物	
	園部 健太郎	横手市	作物	
	相場 美緒	秋田市	野菜	
	近藤 直	秋田市	野菜	
	荒木田祐太郎	仙北市	野菜	
	齊藤 裕磨	横手市	野菜	
	齊藤 大輔	横手市	野菜	
	工藤 沙都海	由利本荘市	花き	
	佐藤 有	横手市	花き	

(2) 秋田県インターンシップ事業（就業体験学習）

期間	研修者の所属・数	区分
24. 7.25~27	能代高校 2名	インターンシップ
24. 8.28~31	秋田県立大学 9名	インターンシップ
		インターンシップ
9.10	石巻専修大学 1名	インターンシップ

※インターンシップ事業については、「秋田県庁インターンシップ実施要綱」に基づき県人事課と協議して実施したものである。

(3) その他研修の受け入れ

H24年度は該当無し

(4) 職員の研修

研修の名称	主催者(期間)	研修目的	所属 氏名
1) 農林水産関係研究者研修	農林水産技術会議事務局	若手及び中堅研究者に対し、最新の施策動向、知財関係に関する諸制度理解を深めるとともに、研究遂行能力の向上及び自己能力開発を目的に研修を行う	H24年度該当無し
①若手研究者研修			
②中堅研究者研修	//		作物部 小玉郁子主任研究員 原種生産部 田口光雄主任研究員 (H24. 6.20~22)
③地方研修	//		H24年度該当無し
④研究リーダー研修	//		//
2) 農研機構関係研修	農業・食品産業技術総合研究機構	研究員の専門能力向上を図るため、独法が実施している受入研修へ派遣する	生産環境部 齋藤雅憲研究員 (H24.10.15~12.28)
①依頼研究員受入れ制度			
②農林生産における技術と経営の評価方法	//	独法が実施する研修で、研究推進上、より効率的、効果的に試験を進めるための手法、技術、知識を身につけ高い研究成果に結びつける事を目的に研修を行う	H24年度該当無し
③農林水産試験研究分野の特許出願の基礎	//		//
④数理統計（基礎編、基礎Ⅱ）	//		作物部 加藤和直研究員 (H24.11.5~9)
⑤数理統計（応用編）	//		H24年度該当無し
3) 北東北3県研究職員人事交流	北東北3県	試験研究機関の研究交流の拡大	
①派遣（本県→青森県・岩手県）		・共同意識の醸成について、農林水産業分野においても速やかに取組を開始し、研究員の資質の向上を図るほか、研究連携の可能性についても調査研究し、研究運営の改善と活力の向上を図る	H24年度該当無し
②-1 受入（青森県→本県）			1名（10. 1~3）3日間
・エダマメの育種方法に関する研修（対応：野菜・花き部佐藤友博主任研究員）			青森県産業技術センター野菜研究所 前嶋敦夫主任研究員

研修の名称	主催者(期間)	研修目的	所属 氏名
②-2 受入(岩手県→本県) ・寒冷地での夏どりねぎ栽培技術 (対応:野菜・花き部本庄求主任研 究員)			2名(7.27~28)2日間 岩手県農業研究センター県北農 業研究所 田代勇樹専門研究員、 武田純子専門研究員

(5) 大学院社会人特別選抜(大学院博士後期課程派遣)

所属 職 氏 名	大学院 研究科名	専攻名、 講座名	研究課題名	派遣期間
野菜・花き部 主任研究員 椿 信一	秋田県立大学 大学院 生物資源科学 研究科	遺伝資源科学 専攻 生物生産科学 講座	秋田県におけるダイコン地方 品種の育成とそれに関わる諸 形質の遺伝・育種学的研究	H24.4.1 ~27.3.31

3. 主な技術協力

(1) 委員応募

名 称	役 職 名	職 名	氏 名	
H24年度原原種及び原種審査員（水稻・大豆・麦類）	審査員（代表者）	企画経営室長	松橋秀男	
	//（副代表者）	生産環境部長	村上 章	
	//（副代表者）	作物部長	佐藤雄幸	
	//	上席研究員	佐野広伸	
	//	主任研究員	松本真一	
	//	主任研究員	三浦恒子	
	//	主任研究員	佐山 玲	
	//	研究員	松波寿典	
	（水稻）	//	主任研究員	小玉郁子
	//	主任研究員	川本朋彦	
	//	研究員	加藤和直	
	//	研究員	佐藤健介	
	（大豆）	//	主任研究員	飛島正人
	//	主任研究員	佐藤友博	
秋田県JA職員資格認証試験委員（畑作）	委員	主任研究員	松本真一	
（園芸）	//	//	林 浩之	
秋田県農業気象連絡協議会	幹事	上席研究員	佐野広伸	
秋田県航空防除推進協議会	委員 幹事	場長 主任研究員	湯川智行 佐山 玲	
秋田県航空防除事業事故対策基金制度運営委員会	委員	部長	村上章	
秋田県航空防除推進協議会事故防止対策委員会	委員	主任研究員	佐山 玲	
秋田県産業用無人ヘリコプター連絡協議会	役員	主任研究員	藤井直哉	
秋田県農業共済組合連合会損害評価会（農作物共済部会）	部会長	場長	湯川智行	
（畑作物共済）	委員	作物部長	佐藤雄幸	
（園芸施設共済）	//	野菜・花き部長	金 和裕	
（任意共済）	//	主任研究員	進藤勇人	
秋田県農業共済組合連合会損害評価員（園芸施設）	評価員	上席研究員 主任研究員	新井正善 佐藤孝夫	
秋田県リサイクル製品認定審査委員会	幹事	部長	村上 章	
八郎湖研究会	専門家委員	部長	村上 章	
秋田市園芸振興協議会	委員	野菜・花き部長	金 和裕	
大仙市農業振興情報センター	運営委員	野菜・花き部長	金 和裕	

名 称	役 職 名	職 名	氏 名
秋田県酒米生産流通対策協議会	会員 幹事	部長 主任研究員	佐藤雄幸 小玉郁子
あきた米粉利用促進会議	委員	部長	佐藤雄幸
業務用キャベツ産地プロジェクトチーム（由利地域振興局）	チーム員 // // //	上席研究員 主任研究員 主任研究員 主任研究員	新井正善 鶴沼秀樹 武田 悟 進藤勇人
H24年度秋田県農作物病害虫・雑草防除基準策定委員会	幹事 // // // // //	上席研究員 主任研究員 主任研究員 主任研究員 主任研究員 主任研究員	佐野広伸 林 浩之 間藤正美 佐山 玲 菊池英樹 藤井直哉
秋田県産米品評会	審査委員長	部長	佐藤雄幸
第二次・秋田県「安全・安心」うまい米づくり運動表彰 審査委員会	委員長	部長	佐藤雄幸
第21回秋田県優良水稻種子共励会	審査委員	上席研究員	北川 悦子
平成24年産水稻種子共済基金支出査定委員会	委員	上席研究員	北川 悦子
第32回秋田県花の祭典花き品評会審査 //	審査長 審査員	主任研究員 主任研究員	佐藤孝夫 間藤正美
第135回種苗交換会農産物審査 第1部 水稻	審査長 第1部 部長 審査員 // // // // // //	場長 部長 主任研究員 主任研究員 主任研究員 主任研究員 研究員 研究員	湯川智行 佐藤雄幸 小玉郁子 川本朋彦 松本真一 三浦恒子 柴田 智 加藤和直
第2部 畑作及び工芸作	第2部 部長 審査員 // // //	部長 上席研究員 主任研究員 主任研究員 研究員	佐藤健介 村上 章 佐野広伸 田口光雄 佐藤 馨
第4部 野菜	第4部 部長 審査員 //	部長 上席研究員 上席研究員	松波寿典 金 和裕 檜森靖則 新井正善

名 称	役 職 名	職 名	氏 名
第4部 野菜	審査員	主任研究員	林 浩之
	//	主任研究員	佐藤友博
	//	主任研究員	椿 信一
	//	主任研究員	飛島正人
	//	主任研究員	本庄 求
	//	主任研究員	篠田光江
	//	主任研究員	武田 悟
	//	技師	三浦一将
第5部 花き	//	主任研究員	佐藤孝夫
	//	主任研究員	間藤正美
	//	研究員	山形敦子
秋田県特別栽培農産物認証制度検討委員会（作物部会） （作物部会・野菜部会） （野菜部会）	委員	主任研究員	藤井直哉
	//	主任研究員	佐山 玲
	//	主任研究員	林 浩之
	//	主任研究員	菊池英樹
未来農業のフロンティア育成研修生受入審査委員会	委員	場長	湯川智行
	面接委員	作物部長	佐藤雄幸
	//	主任研究員	松本眞一
	//	主任研究員	小玉郁子
	//	野菜・花き部長	金 和裕
	//	上席研究員	新井正善
	//	上席研究員	檜森靖則
	//	主任研究員	佐藤孝夫
	//	主任研究員	佐山 玲
	//	主任研究員	武田 悟
	//	主任研究員	石田頼子
作況ニュース編集会議	編集者	作物部長	佐藤雄幸
	//	生産環境部長	村上 章
	//	主任研究員	佐野広伸
	//	主任研究員	松本眞一
	//	主任研究員	三浦恒子
	//	主任研究員	武田 悟
	//	主任研究員	藤井直哉
	//	研究員	高橋良知
第135回秋田県種苗交換会 土壌肥料相談員	相談員	主任研究員	伊藤正志
	//	主任研究員	石田頼子
園芸学会園芸学研究	編集委員	主任研究員	佐藤孝夫
園芸学会東北支部	評議委員	主任研究員	佐藤孝夫
農業機械学会東北支部	幹事	主任研究員	進藤勇人

名 称	役 職 名	職 名	氏 名
平成24年度秋田県立大学大学院講義「秋田農林水産学」	特別講師	野菜・花き部	金 和裕
	//	上席研究員	新井正善
	//	主任研究員	小玉郁子
	//	主任研究員	三浦恒子
	//	主任研究員	佐藤孝夫
	//	研究員	齋藤文信
秋田県農協施肥合理化対策協議会	副委員長	場長	湯川智行
	委員	部長	佐藤雄幸
	//	部長	金 和裕
	//	部長	村上 章
秋田県農協施肥合理化対策協議会幹事会	常任委員	上席研究員	新井正善
	//	主任研究員	松本眞一
	//	主任研究員	武田 悟
東北地域産官学連携共同研究検討会議	研究開発推進委員	主任研究員	本庄 求
農業経営アドバイザー検討会	委員	主任研究員	鶴沼秀樹
日本農業普及学会	都道府県幹事	主任研究員	上田賢悦
日本フードサービス学会2012年度年次大会	実行委員	研究員	齋藤文信
日本フードシステム学会	理事	研究員	齋藤文信

3. 主な技術協力 (2) 講師派遣

月 日	主 催 者	内 容	担 当 部	派 遣 者
H24.				
4. 4	湯沢市農業振興センター	秋田酒こまち栽培講習会	作物部	小玉郁子
4. 9	JA新あきた	病害虫防除講習会	生産環境部	菊池英樹
4.11	湯沢市植物浄化技術推進協議会	ファイトレメディエーション実証事業実績検討会	生産環境部	伊藤正志
4.13	湯沢市水稻直播栽培研究会	水稻直播栽培実績検討会	生産環境部	進藤勇人
	秋田県立大学大学院	秋田農林水産学特別講義「農業の特徴」	野菜・花き部	金 和裕
4.20	秋田県立大学大学院	秋田農林水産学特別講義「農産物流通とマーケティング」	企画経営室	齋藤文信
4.26	JA大潟村	麦類現地講習会	作物部	松波寿典
4.27	秋田県立大学大学院	秋田農林水産学特別講義「稲作・畑作」	作物部	三浦恒子
5.10	JA秋田ふるさと	スプレー菊、EODヒーティング技術現地検討会	野菜・花き部	佐藤孝夫
			//	山形敦子
5.11	秋田県立大学大学院	秋田農林水産学特別講義「野菜」	野菜・花き部	新井正善
5.14	藤里町総合開発センター	県庁出前講座「野菜・花新品種」	企画経営室	田村 晃
5.18	秋田県立大学大学院	秋田農林水産学特別講義「花き」	野菜・花き部	佐藤孝夫
5.31	JA秋田しんせい	ecoらいす栽培講習会	生産環境部	藤井直哉
			//	高橋良知
6. 1	秋田県立大学大学院	秋田農林水産学特別講義「育種」	作物部	小玉郁子
6.14	全農秋田	JA農業機械大展示会	生産環境部	進藤勇人
			作物部	三浦恒子
6.21	平鹿地域振興局	ecoらいす水稻病害虫発生調査研修会	生産環境部	高橋良知
6.22	太平物産	稲作栽培技術研修会	生産環境部	進藤勇人
			作物部	松本眞一
			//	三浦恒子
6.27	JA秋田ふるさと	水稻病害虫モニタリング、稲作技術研修会	生産環境部	高橋良知
6.29	園芸振興課	普及指導員研修「土壌分析」	生産環境部	武田 悟
7. 4	JAあきた北営農センター	フィールドミーティング（病害虫）	生産環境部	藤井直哉
			企画経営室	田村 晃
7. 5	JAうご明治支所	フィールドミーティング（野菜）	野菜・花き部	椿 信一
			//	三浦将人
			企画経営室	田村 晃
7. 6	JA秋田ふるさと	稲作講習会	生産環境部	高橋良知
7.10	園芸振興課	作目別技術研修「作物」	作物部	三浦恒子
7.11	園芸振興課	作目別技術研修「作物」	作物部	松本眞一
7.12	農林水産省農林水産研修所	経営指導力強化研修「マーケティング基礎研修」	企画経営室	上田賢悦
7.13	O-LISA研究会	O-LISA研究会夏期検討会	生産環境部	伊藤千春
	大潟村カンントリー公社	もち米栽培技術講習会	作物部	小玉郁子
	JAあきた北	稲作現地研修会	作物部	松本眞一
7.18	A全農秋田	カドミウム対策の情勢	生産環境部	伊藤正志
			作物部	川本朋彦
7.19	JA秋田やまもと	そばの栽培講習会	作物部	佐藤雄幸
	病害虫防除所	H24年度病害虫防除員研修会	生産環境部	藤井直哉
			//	高橋良知
7.20	由利地域振興局農林部	水稻直播栽培現地検討会	作物部	佐野広伸

月日	主催者	内 容	担 当 部	派遣者
7.20	秋田県立能代西高等学校	ネギ・稲先端技術研修	企画経営室 野菜・花き部 生産環境部	松橋秀男 本庄 求 進藤勇人
7.20	秋田国家石油備蓄基地事務所 秋田県立大学	第13回秋田備蓄フォーラム 第3回環境科学セミナー	野菜・花き部 企画経営室	佐藤孝夫 上田賢悦
7.23	秋田県学校農業クラブ連盟	アフリカの食糧事情とJAICAの役割	企画経営室	松橋秀男
7.25	水田総合利用課	フィールドミーティング(大豆)	作物部	松波寿典
7.26	JA秋田中央会	JA農業経営アドバイザー養成研修会	企画経営室	鶴沼秀樹
7.27	JA秋田中央会	JA農業経営アドバイザー養成研修会	企画経営室	鶴沼秀樹
	山形大学農学部	機械開発のプロセス・市場調査と評価について	企画経営室	齋藤文信
7.30	県農業共済連	施設園芸の病害虫診断について	生産環境部	菊池英樹 藤井直哉
8. 1	県農薬販売協会	「あきたecoらいす」今年の普及状況と課題	生産環境部 //	藤井直哉 高橋良知
8.20	東北育種研究会	東北育種研究会	作物部	川本朋彦
8.21	農業研修センター	農業経営基礎研修前期②	企画経営室	上田賢悦
8.22	JAあきた白神	大豆現地圃場巡回指導	作物部	松波寿典
8.24	平鹿地域振興局	ecoらいす栽培講習会	生産環境部	高橋良知
8.28	JA新あきた 農業研修センター	大豆圃場巡回および研修会 農業経営者研修「土づくり①」	作物部 生産環境部	松波寿典 石田頼子
8.29	JA新あきた営農センター	フィールドミーティング(ecoらいす) //	生産環境部 企画経営室	佐山 玲 田村 晃
8.30	園芸振興課	エダマメ秋農試40号現地研修会	野菜・花き部	本庄 求
9. 4	水田総合利用課	分析精度管理研修会	生産環境部	伊藤正志
9. 5	鹿角地域振興局	直播研修会	生産環境部	進藤勇人
9. 6	JA秋田ふるさと	アスパラガス栽培技術現地研修会	野菜・花き部 生産環境部	篠田光江 武田 悟
9. 7	JA大湯村	大豆栽培講習会	作物部 //	松波寿典 三浦恒子
9.28	JAふるさと	ねぎ講習会	野菜・花き部	本庄 求
10. 9	県立大曲農業高校	県庁出前講座	作物部 野菜・花き部 //	佐藤雄幸 檜森靖則 間藤正美
10.12	園芸振興課	7月どりネギ講習会	野菜・花き部	本庄 求
10.17	仙北地域振興局	安全な野菜検討会	生産環境部	佐山 玲
10.24	仙北市	くりくん蒸用ヨウ化メチル剤講習会	生産環境部	藤井直哉
10.25	仙北市	くりくん蒸用ヨウ化メチル剤講習会	生産環境部	藤井直哉
10.31	水田総合利用課	種苗交換会 水稲栽培コーナー相談員	生産環境部	藤井直哉
11. 1	水田総合利用課	種苗交換会 水稲栽培コーナー相談員	生産環境部	進藤勇人
	水田総合利用課	種苗交換会 水稲栽培コーナー相談員	生産環境部	高橋良知
11. 2	秋田県立大学	キャリアガイダンス	野菜・花き部	三浦一将
11. 3	施肥対策協議会	種苗交換会 土壌肥料相談員	生産環境部	石田頼子
11. 4	施肥対策協議会	種苗交換会 土壌肥料相談員	生産環境部	伊藤正志
11. 6	秋田県産米改良協会	第31回秋田県産米品評会褒賞授与式	作物部	佐藤雄幸
11. 8	JAふるさと	トルコギキョウ栽培研修会	野菜・花き部	間藤正美
11.13	秋田市高齢者学級	県庁出前講座	生産環境部	高橋良知
11.16	秋田市高齢者学級	県庁出前講座	生産環境部	藤井直哉

月日	主催者	内 容	担 当 部	派遣者
11.20	農林政策課 秋田市高齢者学級	未来農業を語る会 県庁出前講座	企画経営室 生産環境部	上田賢悦 菊池英樹
11.21	秋田市高齢者学級	県庁出前講座	生産環境部	菊池英樹
11.22	雄物川地域水稲防除協議会 農業研修センター 平鹿地区花き連	ecoらいす栽培講習会 農業経営者研修「土壌の基礎」 花きリーダー講習会	生産環境部 生産環境部 野菜・花き部	高橋良知 武田 悟 佐藤孝夫 山形敦子
	秋田県立秋田北高等学校 秋田県立秋田北高等学校 秋田市農業委員会	職業人講話 職業人講話 水稲新品種「秋のきらめき」と「つぶぞろい」 について	野菜・花き部 生産環境部 作物部	三浦一将 石田頼子 川本朋彦
12. 4	秋田県農薬販売協会	病害虫防除研修	作物部 生産環境部 生産環境部	三浦恒子 藤井直哉 高橋良知
12. 7	東北農政局	東北大豆シンポジウム in 仙台	作物部	松波寿典
12.11	JA秋田中央会 JA秋田おばこ	JA営農指導総合研修会 JA秋田おばこ枝豆部会実績検討会	野菜・花き部 企画経営室	本庄 求 上田賢悦
12.18	農業研修センター JA新あきた	農業経営者研修「農業経営②」 カメムシ防除講習会	企画経営室 生産環境部	上田賢悦 高橋良知
12.19	JA秋田ふるさと	食用菊現地検討会	生産環境部	菊池英樹
12.20	JA秋田ふるさと 園芸振興課 園芸振興課 園芸振興課	食用菊現地検討会 普及指導員作目別技術研修（作物） 普及指導員作目別技術研修（作物） 普及指導員作目別技術研修（野菜）	生産環境部 作物部 作物部 野菜・花き部 生産環境部	菊池英樹 松本真一 三浦恒子 佐藤友博 武田悟
12.26	JA秋田ふるさと JA秋田ふるさと	斑点米カメムシ対策技術講習会 ネギ栽培・防除講習会	生産環境部 野菜・花き部	高橋良知 本庄 求
H25. 1.17	JA秋田ふるさと	稲作実績検討会 花き病害虫防除と最近の農薬事情	作物部 生産環境部	三浦恒子 藤井直哉
1.18	美郷酒米研究会	美郷酒米研究会研修会	作物部 //	小玉郁子 川本朋彦
1.19	スカイネットワーク秋田	来年度の斑点米カメムシ対策	生産環境部	高橋良知
1.21	鹿角地区花き生産者連絡協議会	鹿角地区花き連研修会	野菜・花き部	佐藤孝夫
1.24	雄勝地方病害虫防除員協議会	雄勝地方病害虫防除員研修会	生産環境部 //	藤井直哉 高橋良知
1.25	JA新あきた	集落営農研修会	生産環境部	高橋良知
1.25	スカイアグリ	スカイアグリ秋田総会・研修会	生産環境部	高橋良知
1.26	JA秋田ふるさと	ササニシキ実績検討会	作物部	三浦恒子
1.26	秋田地域無人ヘリ協議会	秋田地域無人ヘリ協議会研修会	生産環境部	高橋良知
1.29	秋田県農薬販売協会	水稲新品種（96・97号） 合同研修会	作物部	佐藤雄幸
1.30	JAあきた白神	冬季野菜栽培講習会	野菜・花き部	本庄 求
1.30	由利地域振興局農林部	新エネルギーの農業活用等勉強会	企画経営室	鶴沼秀樹
1.31	能代市農業技術センター	冬季野菜栽培講習会	生産環境部	武田 悟
1.31	JAこまち	ネギ病害虫講習会	生産環境部	菊池英樹
2. 1	JA秋田ふるさと	斑点米カメムシ類被害と今後の対策	生産環境部	高橋良知
2. 1	JAあきた北	とんぶり農薬登録試験成績報告会	野菜・花き部	林 浩之
2. 5	JA秋田しんせい	すいか栽培講習会	野菜・花き部	椿 信一

月日	主催者	内容	担当部	派遣者
2.7	J A秋田しんせい	カメムシの生態と防除対策	生産環境部	高橋良知
2.8	鹿角地域振興局	土作りの基礎研修	生産環境部	武田 悟
2.8	J A大湯村	麦類種子生産組合総会	作物部	松波寿典
2.13	J Aかつの	鹿角淡雪こまち検討会	作物部	小玉郁子
2.13	秋田県土地改良事業団体連合会	雄物・米代地域広域基盤確立協議会	企画経営室	上田賢悦
2.14	株式会社ヤンマー	えだまめ産地日本一研修会	野菜・花き部	佐藤友博
	秋田県酒造組合	秋田酒こまち作付け講習会	生産環境部	齋藤雅憲
	大仙市集落営農組織連絡協議会	法人化に向けた農業経営の多角化	作物部	小玉郁子
2.16	J A新あきた	カメムシ防除講習会	企画経営室	上田賢悦
2.20	J A秋田ふるさと	スイカ講習会	生産環境部	高橋良知
2.20	全国農業協同組合東北地区会議	アカスジカスミカメの生態と防除	野菜・花き	椿 信一
2.21	平鹿地方病害虫防除員協議会	次年度に向けた斑点米カメムシ類の防除対策	生産環境部	高橋良知
2.21	J Aあきた湖東	稲作病害虫研修会	生産環境部	高橋良知
2.24	J Aあきた北	冬期稲作講習会	生産環境部	佐山 玲
2.26	秋田県花き連絡協議会	花き連キク部会総会	生産環境部	高橋良知
2.26	秋田県営農集団協議会	異常気象と食味向上、新品種の特性と栽培	野菜・花き部	山形敦子
3.1	J A大湯村	麦類栽培講習会	作物部	佐藤健介
3.1	J A新あきた	花き部会総会及び技術研修会	作物部	松波寿典
3.6	J A新あきた	大豆研修会	生産環境部	菊池英樹
3.7	農事組合法人たねっこ	水稻原種栽培講習会	作物部	松波寿典
3.12	主食集荷協同組合	異常気象と水稻食味向上	生産環境部	藤井直哉
3.12	株式会社池田	トマト栽培講習会	作物部	三浦恒子
3.13	J Aかつの	新テッポウユリ講習会	野菜・花き部	林 浩之
3.13	主食集荷協同組合	異常気象と水稻食味向上	野菜・花き部	佐藤孝夫
3.14	施肥対策協議会	病害虫防除・土作り研修会	作物部	小玉郁子
3.15	J A新あきた	大豆部会栽培研修会	生産環境部	中川進平
3.16	主食集荷協同組合	異常気象と水稻食味向上	作物部	松波寿典
3.16	秋田県立大学	秋田県次世代農業経営者トップセミナー	作物部	佐野広伸
3.16	主食集荷協同組合	異常気象と水稻食味向上	企画経営室	上田賢悦
3.18	県南地区園芸戦略対策協議会	県南地区花き若手後継者研修会	作物部	佐野広伸
3.19	水田総合利用課	大豆生産研修会	野菜・花き部	山形敦子
3.19	主食集荷協同組合	異常気象と水稻食味向上	作物部	松波寿典
3.21	主食集荷協同組合	異常気象と水稻食味向上	生産環境部	高橋良知
3.21	齋彌酒造店	秋田酒こまち栽培講習会	作物部	佐藤雄幸
3.21	J A秋田白神	大豆生産組合研修会	作物部	小玉郁子
3.22	県温暖化対策課	バイオエタノール実証試験成果報告会	//	佐藤健介
3.22	主食集荷協同組合	異常気象と水稻食味向上	作物部	松波寿典
3.22	J A秋田ふるさと	EODヒーティング技術研修会	生産環境部	齋藤雅憲
3.23	認定農業者の会	認定農業者・農作業受託組合合同研修会	作物部	松本眞一
3.25	J A秋田しんせい	りんどう実績検討会	野菜・花き部	佐藤孝夫
3.26	秋田市認定農業者協議会	秋田市認定農業者協議会研修会	//	山形敦子
3.27	J A秋田しんせい	特A実証ほ及び水稻新品種栽培講習会	作物部	加藤和直
			生産環境部	菊池英樹
			企画経営室	上田賢悦
			作物部	松本眞一

VII. 成果の発表

1. 試験研究の概要

(1) 試験研究の総括

研究部	課題(大課題)数
企画経営室 経営班	4
作物部	16
原種生産部	1
野菜・花き部	13
生産環境部	19
プロジェクトチーム	1 (あきたe c oらいすプロジェクト)
合計	55

注) プロジェクト研究は、各部にまたがるものとした

(2) 実用化できる試験研究成果(平成24年度試験研究成果)

事項	内 容	研究期間	担当部
普及	1 早生で良食味の水稲新品種「秋のきらめき」	H19~24	作物部
	2 晩生で多収・良食味の水稲新品種「つぶそろい」	H19~24	作物部
	3 大果・多収の夏秋どり栽培用イチゴ品種「Portola」	H21~24	野菜・花き部
	4 黄緑色の八重咲きトルコギキョウ新品種「こまちグリーンドレス」	H11~24	野菜・花き部
	5 物理的防除資材を利用した食用ぎくのアザミウマ類に対する減農薬防除技術	H22~24	生産環境部
	6 ビームソル剤の低濃度処理及び各種箱施用剤の苗の葉もち防除効果	H23~24	生産環境部
	7 植物浄化が実施できるイネ「長香穀」の栽培管理マニュアル	H18~24	生産環境部
	8 シグモイド溶出型被覆肥料を主体とした側条施肥の窒素利用率と省力減肥栽培	H20~23	生産環境部
参考	1 秋田県の大豆圃場における帰化アサガオ類の発生状況調査と現地対応	H22、24	作物部
	2 水稲の育苗箱全量施肥と密植を組み合わせた無効分げつ抑制栽培による白未熟粒の発生軽減	H19、22	作物部、生産環境部
	3 有孔緑マルチと不織布の併用により春～初夏どりキャベツの収穫が早まる	H20~24	野菜・花き部
	4 無加温ハウスによるキャベツの越冬4～5月収穫	H20~24	野菜・花き部
	5 八郎湖干拓地の代かき水田における流入水の増加に伴う水質汚濁物質の浄化	H 6~23	生産環境部
	6 無代かき栽培における移植直前灌水によるメタンガスの抑制と水稲生育への影響	H22-24	生産環境部
	7 稲わらの持出しが水稲生育と土壌の交換性カリに及ぼす影響	H20~24	生産環境部
	8 畑ほ場における有機物施用と土壌炭素量の維持	H20~24	生産環境部
	9 水田内にノビエが多いと斑点米が増加するが、その影響範囲は局所的である	H20~24	生産環境部
	10 水稲の育苗箱施用剤(ファーストオリゼフェルテラ粒剤)使用ハウスでは後作葉菜類への成分残留濃度は低い	H23、24	生産環境部

事項	内 容	研究期間	担当部
参考	1 1 大区画水田ほ場におけるコンバイン収穫後稲わらの 収集運搬体系の作業効率	H21~24	生産環境部
	1 2 反転作業と土壌水分がコンバイン収穫後稲わらの乾燥に及ぼす影響	H23	生産環境部
	1 3 大豆子実用高周波容量式水分計によるコンバイン収穫後 稲わら水分の簡易推定	H23	生産環境部

2. 学会・研究会発表

学会等の名称	年月	題 目	発 表 者
日本雑草学会第51回大会	24. 4	水稲の中干し期間に発生するタイヌピエの生育および結実条件の解析	三浦恒子・進藤勇人 ・森田弘彦（秋田県立大）
日本土壌肥料学会 東北支部会	24. 7	湛水管理ほ場における土壌理化学性と走行性の実態	中川進平・伊藤正志 ・武田悟・石田頼子
土壌肥料学会東北支部大会	24. 7	無代かき栽培における移植前の湛水時期の違いがメタンガスの発生と水稲生育に及ぼす影響	伊藤千春
日本土壌肥料学会東北支部会	24. 7	水田転換畑栽培ダイズの子実Cd濃度予測と吸収特性	伊藤正志・中川進平 ・石田頼子・武田悟 ・川崎晃（農環研）
東北農業試験研究発表会	24. 8	八郎潟干拓地水田における長期要素欠除及び有機物施用の影響 第4報 長期リン酸欠除による可給態リン酸の低減と水稲のリン酸吸収及び収量性の変化	伊藤千春
東北農業試験研究発表会	24. 8	平成23年度の莖数不足条件下における八郎潟干拓地水稲の深水・疎植栽培の生育特性	伊藤千春
日本作物学会東北支部会第55回大会	24. 8	定点調査圃「あきたこまち」における良質粒率の年次間差	佐藤雄幸・松本眞一
第14回東北雑草研究会	24. 8	水稲湛水直播栽培におけるピラゾレート粒剤少量散布の残効性	三浦恒子・佐野広伸 ・森田弘彦（秋田県立大）
日本作物学会東北支部会第55回大会	24. 8	水稲の無効分げつ抑制栽培による白未熟粒軽減技術の開発	三浦恒子・進藤勇人
第55回日本作物学会東北支部会講演会	24. 8	異なる基肥量に対する大粒多収品種「秋田63号」の初期生育反応	松波麻耶（秋田県立大）、松波寿典・小玉郁子・佐野広伸・加藤和直・佐藤健介 ・川本朋彦、小川敦史（秋田県立大）
第55回日本作物学会東北支部会講演会	24. 8	低投入条件下における水稲有望系統「秋田107号」の初期生育	松波寿典、松波麻耶（秋田県立大）、小玉郁子・佐野広伸・佐藤雄幸、小川敦史（秋田県立大）

学会等の名称	年月	題 目	発 表 者
日本農業経営学会	24. 9	第4分科会東北水田農業の構造変化と経営管理問題の新たな展開 「秋田県中山間地における大規模水田作経営の経営革新と課題」	上田賢悦
第234回日本作物学会講演会	24. 9	グライ土壌の水田転換畑における水稲無代かき栽培後の大豆無中耕 無培土栽培	松波寿典・井上一博 ・佐藤健介・佐藤雄幸・進藤勇人・佐藤信和・高橋善則・佐藤敬亮・佐々木景司 ・猿田進
日本土壌肥料学会 鳥取大会	24. 9	堆肥と炭酸苦土石灰の施用が野菜のカドミウム収支に及ぼす影響	中川進平・伊藤正志 ・武田悟、高階史章 (秋田県立大)、石田頼子
園芸学会	24. 9	積雪寒冷地におけるネギの無加温チェーンポット育苗による早期収穫と長期出荷	本庄求・武田悟
東北農業研究	24. 8	ネギのハウス越冬セル大苗における定植後のトンネル被覆の効果	本庄求・新井正善
園芸学会平成24年度秋季大会	24. 9	八重咲きトルコギキョウ'こまちグリーンドレス'の育成と特性	間藤正美
園芸学会	24. 9	ネギ栽培において、土壌の可給態リン酸が生育・収量に及ぼす影響	武田悟・石田頼子 中川進平・伊藤正志
土壌肥料学会	24. 9	堆肥の化学肥料代替量分の減肥によるキャベツ収量の維持と環境負荷の低減	石田頼子・武田悟・ 中川進平・伊藤正志
The Monsoon Asia Agro-Environmental Research Consortium (MARCO)	24. 9	Effect of Successive Application of Organic Materials to an Andosol Field in a District of Northern Japan	石田頼子・中川進平 ・伊藤千春・武田悟 ・伊藤正志
地域農林経済学会	24.10	じゅんさいの産地マーケティングの実態と課題—加工業者を中心に—	上田賢悦、清野誠喜 (新潟大)
地域農林経済学会	24.10	フードサービス業による農業参入に関する—考察—ローカルチェーンを対象に—	齋藤文信、清野誠喜 (新潟大)
第21回秋田応用生命科学研究会	24.12	白米粒を用いた尿素澱粉溶解法によるモチ硬化性の反応速度論的解析と澱粉結晶解析	小玉郁子、藤田直子 ・中村保典・秋山美展 (秋田県立大)
第66回北日本病害虫研究会	25. 2	水田内のノビエがアカスジカスミカメによる斑点米被害に及ぼす影響	高橋良知・菊池英樹
第66回北日本病害虫研究会	25. 2	トリシクラゾール水和剤の低濃度処理及び各種育苗箱施用剤の水稲育苗の葉いもち防除効果	藤井直哉・佐山 玲

学会等の名称	年月	題 目	発 表 者
第235回日本作物学会講演会	25. 3	根圏温度がカドミウム低吸収ダイズの吸水能に及ぼす影響	松波寿典、加藤信・菊池彰夫・松波麻耶（秋田県立大）、佐藤敬亮
日本農作業学会平成25年度春季大会	25.3	八郎潟干拓地重粘土水田ほ場での稲わら収集作業の効率化に関する研究 （第6報）－ロールベール運搬装置を用いた運搬作業の効率化－	齋藤雅憲・進藤勇人、片平光彦（山形大）、加藤良成・山谷正治（県農業公社）
日本農作業学会平成25年度春季大会	25.3	八郎潟干拓地重粘土水田ほ場での稲わら収集作業の効率化に関する研究（第7報） －稲わら収集運搬作業体系の評価－	片平光彦（山形大）、進藤勇人・齋藤雅憲、加藤良成・山谷正治（県農業公社）
日本農作業学会平成25年度春季大会	25.3	施肥溝切り機を用いた側条施肥による長ネギの生育促進効果と施肥量低減	進藤勇人・片平光彦（山形大）、本庄求・齋藤雅憲
日本育種学会第123回講演会	25. 3	低アミロース性を示すスターチシンターゼ（SS）IVb欠損変異体の登熟温度の澱粉構造への影響	小玉郁子・川本朋彦・加藤和直・佐藤健介、クロフツ尚子・追留那緒子・松波麻耶・藤田直子（秋田県立大）
第54回日本植物生理学会	25. 3	超多収イネ秋田63号の収量ポテンシャルを支配している遺伝要因の同定と特徴づけ	小原実広（国際農研）、小玉郁子、金田吉弘（秋田県立大）、前忠彦・牧野周（東北大）

3. 学会誌・研究会誌の投稿

論文名	執筆者	発行誌名 巻・号・項	年月
Genotypic variation in biomass production at the early vegetative stage among rice cultivar subjected to deficient soil moisture regimes and its association with water uptake capacity	Matsunami M, Matsunami T, Ogawa A, Toyofuku K, Kodama I, Kokubun M.	Plant Production Science Vol.15:82-91	2012. 4
Genotypic Variation in Nitrogen Uptake during Early Growth among Rice Cultivars under Different Soil Moisture	Maya matsunami,Toshinori matsunami,Kazuhiro kon,Atsushi Ogawa,Ikuko Kodama,Makie Kokubun	Plant Production Science 15(2):82-91	2012. 4
種芋移植機を用いたツクネイモ定植作業の省力化技術（第2報）	片平光彦（山形大）、進藤勇人・上田賢悦・鈴木基（鹿角普及）・小林由喜也（秋田県立大）	農業機械学会誌 74巻・3号・pp220-225	2012. 5
寒冷地の水稲湛水土中直播栽培における一発処理除草剤の使用条件拡大のためのピラゾレート粒剤少量散布の適用	三浦恒子・進藤勇人、中山壮一（東北農研）、平川謙一（秋田県庁）、田口奈穂子（仙北普及）、森田弘彦（秋田県立大）	雑草研究57. 46-55	2012. 6
八重咲きトルコギキョウ'こまちグリーンドレス'の育成と特性	間藤正美・山形敦子・佐藤孝夫	園芸学研究第11巻別冊2. P232	2012. 9
笑気ガス処理により作出された4倍体シンテップウユリの栽培特性	佐藤孝夫・山形敦子・間藤正美・三吉一光（秋田県立大）	園芸学研究第11巻別冊2. P495	2012. 9
花芽発達期におけるEOD-Heating処理の最低温度が輪ギクの開花と切り花品質に与える影響	山形敦子・佐藤孝夫・間藤正美	園芸学研究第11巻別冊2. P519	2012. 9
シグモイド溶出型被覆肥料を主体とした側条施肥による高品質米の省力減肥栽培 第3報 砂壤土水田における現地実証	進藤勇人・三浦恒子・齋藤雅憲、安田源一郎・児玉洋文（JA秋田みなみ）	東北農業研究 65号・p43-44	2012.12
直播水稲分げつ期における冠水が生育に及ぼす影響	進藤勇人・齋藤雅憲・佐藤雄幸	東北農業研究 65号・p47-48	2012.12
水稲定点圃における水稲品種「あきこまち」の穂数低下要因	佐藤雄幸・松本眞一	東北農業研究65. 49-50	2012.12
水稲移植栽培における栽植密度の確保と葉色の維持による登熟期の高温対策	三浦恒子・進藤勇人・齋藤雅憲・松本眞一	東北農業研究65. 51-52	2012.12

論文名	執筆者	発行誌名 巻・号・項	年月
水稲品種「あきたこまち」における浸種後種子の保存条件が発芽に及ぼす影響	佐藤健介・川本朋彦	東北農業研究65. 53-54	2012.12
ネギのハウス越冬セル大苗における定植後のトンネル被覆の効果	本庄求・新井正善	東北農業研究	2012.12
八郎潟干拓地水田における稲わら収集作業の特徴	齋藤雅憲・進藤勇人、片平光彦（山形大）、加藤良成・山谷正治（県農業公社）	農業機械学会東北支部報 59号・p39-42	2012.12
八郎潟干拓地稲わら収集作業における稲わら水分の変動要因 反転作業・土壌水分が稲わら水分に及ぼす影響と高周波容量式水分計による稲わら水分の簡易推定	進藤勇人・齋藤雅憲、片平光彦（山形大）、加藤良成・山谷正治（県農業公社）	農業機械学会東北支部報 59号・p43-46	2012.12
イネカラバエに対する有効薬剤の検索	高橋良知・菊池英樹	北日本病虫研報63： 124-126	2012.12
水稲の無効分げつ抑制栽培による白未熟粒軽減技術の開発	三浦恒子・進藤勇人	日本作物学会東北支部報 第55号	2012.12
異なる基肥量に対する大粒多収品種「秋田63号」の初期生育反応	松波麻耶（秋田県立大）、松波寿典・小玉郁子・佐野広伸・加藤和直・佐藤健介・川本朋彦、小川敦史（秋田県立大）	日本作物学会東北支部会報 第55号：1-4	2012.12
窒素追肥時期が疎植栽培したあきたこまちの収量、品質に及ぼす影響	松波寿典、能登屋美咲（農試研修生）、三浦恒子・佐藤雄幸、松波麻耶（秋田県立大）	日本作物学会東北支部会報 第55号：5-12	2012.12
低投入条件下における水稲有望系統「秋田107号」の初期生育	松波寿典、松波麻耶（秋田県立大）、小玉郁子・佐野広伸・佐藤雄幸、小川敦史（秋田県立大）	日本作物学会東北支部会報 第55号：31-32	2012.12
定点調査圃「あきたこまち」における良質粒率の年次間差	佐藤雄幸・松本眞一	日本作物学会東北支部報 55. 33-34	2012.12
Microbial community composition controls the effects of climate change on methane emission from rice paddies	Liu GC, Tokida T, Matsunami T, Nakamura H, Okada M, Sameshima R, Hasegawa T, Sugiyama S.	Environmental Microbiology Reports Vol.4:648-654	2012.12

論文名	執筆者	発行誌名 巻・号・項	年月
Rice cultivar responses to elevated CO ₂ at two free-air CO ₂ enrichment (FACE) sites in Japan	Hasegawa H, Sakai H, Tokida T, Nakamura H, Zhu C, Usui Y, Yoshimoto M, Fukuoka M, Wakatsuki H, Matsunami T, Kaneta Y, Sato T, Takakai F, Sameshima R, Okada M, Mae T, Makino A.	Functional Plant Biology Vol.40:148-159	2013. 1
硬化性が異なる糯品種におけるアミロペクチン構造と糊化特性	小玉郁子	秋田育種談話会記事 27: 10-12	2013. 3
The contribution of entrapped gas bubbles to the soil methane pool and their role in methane emission from rice paddy soil in free-air [CO ₂] enrichment and soil warming experiments	Tokida T, Chang W, Adachi M, Matsunami T, Nakamura H, Okada M, Hasegawa T.	Plant and Soil Vol.364:131-143	2013. 3

4. 新聞・雑誌の投稿・記事

(1) 新聞関連

誌名等	掲載月日	内容	関係部	区分
秋田魁新報社		「研究機関から」		
	H24. 5.16	夏採りネギ、技術開発	野菜・花き部	提供
	7.16	夏採りネギ普及促進	野菜・花き部	提供
	8.29	無代かきで排水向上	生産環境部	提供
	10.17	4回防除で食害減少	生産環境部	提供
	12.19	ネギ定植、一層効率化	生産環境部	提供
	H25. 2. 6	大豆の防除に新指標	生産環境部	提供
	3.26	薬剤は開花3日まで (「エダマメベと病」)	生産環境部	提供
	H24. 4. 2	県農試カドミウム吸収しにくいコメ新品種開発へ	生産環境部	取材
	5.25	田植え盛期に稲刈り 研究用品種を収穫	作物部	取材
	7. 4	県農業試験場、4新品種を開発 高単価取引に期待	野菜・花き部	取材
	7.18	夏採りネギで収入増に期待 大苗定植、収穫期早める	野菜・花き部	取材
	8.22	水稻新品種候補96・97号	作物部	取材
9. 3	県農業試験場参観デー	全場	取材	
日本農業新聞	H24. 5.14	電照菊栽培導入探る 太陽光+LED 移動可能なシステムに	野菜・花き部	取材
	7.11	省力・低コスト報告 秋田県農試 水稻無代かき後大豆など	作物部	取材
	7.15	「秋田96号」「秋田97号」米新品種の名称募集	企画経営室	取材
	9. 7	農試の参観デー研究成果を披露	全場	取材
農業共済新聞		「明日の農業を県農試から」		
	H24. 4.11	③⑩ 大豆 水稻無代かき栽培後の狭畦密植栽培で安定多収	作物部	提供
	5.16	③⑪ 水稻 プリンス剤抵抗性イネドロオイムシとイネカラバエに対する有効薬剤	生産環境部	提供
	6.15	②⑫ 作溝チゼル付き施肥溝切り機長ネギの定植作業を改善	生産環境部	提供
	7.13	②⑬ 夏どりネギを安定生産	野菜・花き部	提供
	8.10	②⑭ 9月2,3日に参観デー	全場	提供
	9.14	②⑮ 減量施肥でイモチ病防除	生産環境部	提供
	10. 5	水稻育苗後の葉菜づくり 農薬残留基準の改正について	生産環境部	提供
	10.12	②⑯ 秋冬どりネギ	野菜・花き部	提供
	11. 9	②⑰ 水稻新品種「ゆめおぼこ」の目標収量と理想生育量	作物部	提供
	H25. 2.15	②⑱ 2011年の稲作を振り返って	作物部	提供
	3.14	②⑲ 2012年の水稻／種子予措の再点検 ～低温時の種子消毒に注意～	生産環境部	提供
	H24. 7.18	新品種に期待 県オリジナルの野菜・花	全場	取材

誌名等	掲載月日	内 容	関係部	区分
朝日	H24. 4.19	「つや姫」栽培お試し中 一県・JA、人気米の適性調査一	作物部	取材
	7. 5	秋田の味「いぶりがっこ」用の大根 農業試験場が開発	野菜・花き部	取材
毎日新聞	H24.9. 25	ふるさとのエネルギー～移動式太陽光発電～	野菜・花き部	取材

(2) 著書

書名・頁	発行所	著者名	題名	発行日
高等学校農業用教科書 農業と環境	実教出版株式 会社	湯川智行	第2章3 日本の農業・農村と食糧供給 第4章2 イネ // 3 トウモロコシ	2013. 1.25
高等学校農業用教科書 農業と環境 教授用指導書	実教出版株式 会社	湯川智行	第2章3 日本の農業・農村と食糧供給 第4章2 イネ // 3 トウモロコシ	2013. 1.25
最新農業技術 作物vol.5	(社)農山漁村 文化協会	松波寿典・進藤 勇人・高山真幸 ・佐藤雄幸	水稲無代かき直播とダイズ無培土栽培の 組み合わせ	2013. 1.30
最新農業技術 作物vol.5 P109-118	(社)農山漁村 文化協会	松波寿典・進藤 勇人・高山真幸 ・佐藤雄幸	大豆無培土栽培技術—イネ無代かき直 播との組み合わせ—	2013. 1.31
農業技術体系 花き編	(社)農山漁村 文化協会	佐藤孝夫	笑気ガスを利用した倍数性育種・半数体 育種	2013. 3月
農業技術体系 花き編	(社)農山漁村 文化協会	佐藤孝夫	育種の着眼点と実際 ダリア (鷺沢幸 治)	2013. 3月
農業技術体系 花き編	(社)農山漁村 文化協会	佐藤孝夫	育種の着眼点と実際 コリ(無花粉コリ)	2013. 3月
最新農業技術花卉vol.5	(社)農山漁村 文化協会	佐藤孝夫	育種手法の最前線 笑気ガスを利用した 倍数性育種・半数体育種	2013. 3.20
最新農業技術花卉vol.5	(社)農山漁村 文化協会	佐藤孝夫	秋田国際ダリア園による品種育成	2013. 3.20
最新農業技術花卉vol.5	(社)農山漁村 文化協会	佐藤孝夫	この品種で作業性改善 無花粉コリ	2013. 3.20

(3) 雑誌関連

誌名	掲載年月	内容	担当者名
特産種苗	24.10	特集 品種の収集・保存・配布 秋田県における地方野菜在来品種の収集・保存・配布	野菜・花き部 椿 信一
JATAFFジャーナル	25. 1	特集 地域が誇る農の逸品2013 秋田名物「いぶりがっこ」に最適な漬物用ダイコン新品種「秋農試39号」	野菜・花き部 椿 信一
日本ダリア会会報第9号	25. 3	電照方法によるダリアの露心花対策技術	野菜・花き部 山形敦子
研究ジャーナル.vol11.3.P6-9.	25. 3	ダリアの画期的な新品種育成と普及 鷲沢幸治	野菜・花き部 佐藤孝夫
水稻直播研究会会誌 第36号	25. 3	秋田県における平成24年度の気象経過と直播水稻の生育	作物部 佐野広伸・三浦恒子・松本眞一・松波寿典・佐藤雄幸
日本植物調節剤研究協会東北支部会報48. 17-18	25. 3	2012年の秋田県における水田雑草の発生活長及び除草剤の効果発現等と気象との関連について	作物部 三浦恒子
日本植物調節剤研究協会東北支部会報48. 31-33	25. 3	平成24年度水稻関係除草剤試験中間現地検討会報告	作物部 佐野広伸

5. 研究資料

(1) 主要刊行物の発行状況

誌名	発行時期	発行形式
平成23年度年報	H24年 6月	PDF化 HP掲載
平成23年度研究成果概要	H24年 6月	PDF化
研究報告第52号	H24年 3月	PDF化 HP掲載
研究時報第51号	H24年 3月	PDF化 HP掲載

研究報告第52号の内容

題名	執筆者
【一般報告】 1.水稲新品種「ゆめおばこ」の育成	川本朋彦 他

研究時報第51号の内容

題名	執筆者
1.水稲品種「ゆめおばこ」の目標収量及び理想生育量の策定	柴田 智
2.異なる水管理と栽植密度の組合せが水稲の生育・収量に及ぼす影響	伊藤千春 他
3.地域外有機物資材連用によるCO ₂ 土壌蓄積量は資材輸送による発生量より大きい	伊藤千春 他
4.水質改善対策技術導入による八郎湖水質（COD）の20年後の将来予測	伊藤千春 他
5.秋冬どりネギのネギアザミウマに対する省力的で低コストな防除体系	菊池英樹 他
6.高温登熟時における出穂期前後各3週間の常時湛水管理が玄米品質に及ぼす影響	金 和裕 他
7.エダマメベと病による汚損莢防止に対する防除薬剤及び散布適期	佐山 玲 他
8.作業チゼル付き施肥溝切り機を用いたネギ定植の作業改善	片平光彦 他
9.施肥溝切り機を用いた側条施肥による7月どりネギの生育促進効果と施肥量低減	進藤勇人 他
10.シグモイド溶出型被覆肥料を主体とした側条施肥による高品質米の省力減肥栽培 第1報 分けつ発生消長と登熟形質	進藤勇人 他
11.シグモイド溶出型被覆肥料を主体とした側条施肥による高品質米の省力減肥栽培 第2報 分けつ発生消長と登熟形質	進藤勇人 他
12.ダイズにおけるウコンノメイガの要防除水準	高橋良知 他
13.密土と根域制限による葉菜類のカドミウム吸収抑制	武田 悟 他
14.Dr.オリゼプリンスエース粒剤の減量施用によるいもち病防除	藤井直哉 他
15.有効積算気温法を用いた大豆品種「リュウホウ」開花予測	松波寿典 他
16.疎植栽培したあきたこまちで高品質米を安定生産するためには減数分裂期の追肥が重要である	松波寿典 他
17.秋田県における平成22年度産水稲の作柄低下の品種間差異	松本真一 他
18.高温登熟を避ける水稲品種「あきたこまち」の好適出穂期と移植時期の推定	佐藤雄幸 他

題 名	執 筆 者
19.水稲湛水直播栽培におけるシグモイド溶出型被覆肥料を主体とした側条施肥による生育抑制	三浦恒子 他
20.秋田県南地域におけるリュウホウの子実中タンパク質含有量と栽培条件との関連	佐藤健介 他
21.秋田県におけるエダマメのトンネル被覆と移植による作期の前進	本庄 求

(2) 不定期刊行物の発行状況

誌名	発行時期	部数等	主な配布先
業務概要リーフレット (カラーコピー)	H24年随時	1,000部	見学者(県民、学生等)

6. 表彰

受賞名	年月	所属	役職	氏名
全国農業関係試験研究場所長会 平成24年度研究功労者表彰	H24. 6	野菜・花き部	主任研究員	佐藤 孝夫
園芸学会東北支部研究部門賞	H24. 9	野菜・花き部	主任研究員	本庄 求
園芸学会東北支部普及部門賞	H24. 9	元野菜・花き部	上席研究員	田口 多喜子
平成24年度農業技術功労者表彰	H25. 3	元農業試験場長	児玉 徹	
秋田県職員永年勤続表彰 (勤続30年)	H24.11	企画経営室	室長	松橋 秀男
		野菜・花き部	部長	金 和裕
// (勤続20年)		野菜・花き部	上席研究員	新井 正善
		生産環境部	主任研究員	伊藤 正志
		//	主任研究員	佐山 玲

7. 知的財産関係

(1) 特許関連一覧（秋田県が出願人の特許の中で出願時農業試験場職員が関わった特許）

特許の名称	発明者	共同出願人	特許出願日 出願番号	出願公開 公開番号	特許登録 登録番号	備考
ジュンサイの処理法	金和裕、塚本研一、 斎藤英樹、鈴木芳夫、加藤文子		H4.12.30 特願平4- 360021	H6. 7.19 特開平6- 197682	H9.5.23 特許第 2652115号	H6.4JA秋田やまもとに実施許諾（契約更新中）、製品化済
ジュンサイの凍結貯蔵法	金和裕、伊藤汎		H5.12.27 特願平5- 352122	H7.7.25 特開平7- 184537	H9.5.23 特許第 2652132号	H6.4JA秋田やまもとに実施許諾（契約更新中）、製品化済
直播用播種機における汎用型点播機構	鎌田易尾、久米川孝治、金田吉弘、片平光彦、若松一幸、児玉徹		H12.3.6 特願2000- 060854	H13.9.11 特開2001- 245507	H14.5.10 特許第 3306406号	H19.5 登録料納付停止
収穫機（エダマメ）	片平光彦、久米川孝治、鎌田易尾、藤村辰夫、伊藤義久、石田伊佐男、荒木正勝、遠藤貴志	井関農機株式会社	H13.10.31 特願2001- 334863	H15.5.13 特開2003- 134913	H17.8.19 特許第 3710056号	H16.11.29井関農機(株)に許諾、製品化済 H18年度末で実施契約終了
砂丘地用施肥溝切り機	片平光彦、久米川孝治、進藤勇人、田村保男		H15.3.31 特願2003- 093096	H16.10.28 特開2004- 298032	H18.6.16 特許第 3817527号	H18.3.15(株)ママトラ象潟工場に実施許諾、製品化済
結束用テープ	片平光彦、佐々木和則、森川吉二郎		H15.12.24 特願2003- 426430	特開2005- 178893	H19.6. 8 特許第 3966854号	H17.4.14(株)共和に実施許諾、製品化済
エダマメの精選別方法とその精選別装置	片平光彦、鎌田易尾、渋谷功、森川吉二郎		H16.3.30 特願2004- 099488	H17.10.13 特開2005- 279524	H18.9.22 特許第 3858030号	
雄性不稔性コリの稔性回復法	佐藤孝夫、三吉一光	秋田県立大学	H17.2.22 特願2005- 045010	H18. 特開2006- 230205	—	H20. 2審査請求、H23.2拒絶査定、取り下げ
莢果判別構造	片平光彦、張樹槐、後藤恒義、大泉隆弘、西田幸弘	山本製作所	H18.7.13 特願2006- 192895	H20.1.31 特開2008- 020347	H25.3.15 特許第 5216977号	山本製作所と共同出願、H23.12拒絶通知、H24.4対抗
莢果判別装置	片平光彦、張樹槐、後藤恒義、大泉隆弘、西田幸弘	山本製作所	H18.9.4 特願2006- 239338	H20.3.21 特開2008- 062116	—	山本製作所と共同出願、H21.1.3審査請求、拒絶通知、対抗断念

※アンダーラインが農業試験場関係職員（出願時）

特許の名称	発 明 者	共同出願人	特許出願日 出願番号	出願公開 公開番号	特許登録 登録番号	備 考
直播用高速点播 機構	若松一幸、片平光 彦		H19.5.22 特願2007- 134897	H20.12.4 特開2008- 289366	H24.6.8 特許第 5007974号	
莢果判別構造	片平光彦、張樹槐、 後藤恒義、大泉隆 弘	山本製作所	H20.2.13 特願2008- 032362	H21.8.27 特開2009- 189936		山本製作所と共 同出願、H23.2. 14審査請求、 H25.1.17拒絶 通知、H25.3 月対抗
姿勢調整機構	片平光彦、張樹槐、 後藤恒義、大泉隆 弘	山本製作所	H20.2.13 特願2008- 032363	H21.8.27 特開2009- 190827	—	山本製作所と共 同出願、H23. 2.14審査請求、 H25.1.17拒絶 通知、対抗断念
栽培容器、高糖 度の果菜の栽培 方法、及び高糖 度トマト	小川敦史、豊福恭 子、林浩之、田口 多喜子、高橋善則	秋田県立大学	H22.11.11 特願2010- 252808	H24.5.31 特開2012- 100595		秋田県立大と共 同出願、審査請 求未了

※アンダーラインが農業試験場関係職員（出願時）

(2) 品種登録一覧（登録が維持されている品種）

出願番号	登録番号	種 類	品 種 名 称	登録年月日	許 諾 先
8686	7750	稲	秋の精	H12.02.22	秋田県酒造協同組合
10606	9303	稲	めんこいな	H13.10.12	秋田県産米改良協会
10690	9650	えだまめ	あきたみどり	H14.01.16	//
11614	10238	稲	美郷錦	H14.06.20	秋田県酒造協同組合
13307	11840	稲	秋田酒こまち	H16.03.09	秋田県産米改良協会
13309	11956	メロン	秋田甘えんぼ	H16.03.15	
14634	12844	だいこん	あきたおにしぼり	H17.03.14	J Aかつの
14635	12826	稲	秋田63号	H17.03.14	秋田県産米改良協会
15597	13765	だいこん	秋田いぶりこまち	H18.02.27	秋田県農業公社
16924	15008	メロン	秋田甘えんぼ春系	H19.03.15	秋田県農業公社
16925	15009	メロン	秋田甘えんぼレッド春系	H19.03.15	//
16926	15010	メロン	秋田甘えんぼレッド	H19.03.15	//
16927	15135	すいか	あきた夏丸	H19.03.15	//
16928	15129	えだまめ	あきた香り五葉	H19.03.15	//
16929	18328	トルコぎきょう	あさみ八重	H21.07.31	
18258	16290	稲	淡雪こまち	H20.03.06	秋田県産米改良協会

出願番号	登録番号	種 類	品 種 名 称	登録年月日	許 諾 先
18259	15781	ふき	こまち笠	H19.12.17	大館北秋田森林組合
19605	17368	すいか	あきたシャリン娘	H21.02.24	秋田県農業公社
19606	17274	メロン	こまちクイーン	H21.02.06	//
21664	19694	稲	ゆめおぼこ	H22.08.13	秋田県産米改良協会
22220	18385	えだまめ	あきたさやか	H21.09.10	秋田県農業公社
23789	20807	トルコぎきょう	こまちホワイトドレス	H23.05.24	
25769	22168	すいか	秋農試38号	H25.01.28	秋田県農業公社

(3) 品種登録出願一覧(取下または拒絶された品種を除く)

出願番号	種 類	品 種 名 称	出願日	出願公表日
26165	だいこん	秋農試39号	H23.07.22	H24.01.13
26669	えだまめ	秋農試40号	H24.01.17	H24.04.23
26670	トルコぎきょう	こまちグリーンドレス	H24.01.17	H24.04.23
27326	稲	秋のきらめき	H24.08.24	H24.11. 8
27327	稲	つぶぞろい	H24.08.24	H24.11. 8
27755	えだまめ	あきたほのか	H24.12.27	H25. 3.25

(4) 期間満了及び登録中止品種一覧 (出願番号順)

出願番号	登録番号	種 類	品 種 名 称	登録年月日	育成者権の 消滅日
2255	2209	稲	あきた39	H 2.04.06	H17.04.07
4372	3574	稲	きぬのはだ	H 5.07.27	H20.07.28
4373	3575	稲	たつこもち	H 5.07.27	H20.07.28
4374	3343	稲	吟の精	H 5.01.18	H20.01.19
6633	5065	稲	でわひかり	H 8.06.13	H23.06.14
11615	10550	カーネーション	ポートレッド	H14.09.04	H17.09.06

出願番号	登録番号	種 類	品 種 名 称	登録年月日	育成者権の 消滅日
13103	11369	カブ	あきた平良	H15.08.19	H18.08.22
13308	11841	稲	小紫	H16.03.09	H19.03.10
13310	13051	カーネーション	ユアレッド	H17.03.23	H20.03.25
14633	13554	トルコぎきょう	こまちキッス	H17.12.07	H20.12.09
15594	13257	ゆり	秋田プチクリーム	H17.06.22	H20.06.24
15595	13258	ゆり	秋田プチレモン	H17.06.22	H20.06.24
15596	13259	ゆり	秋田プチゴールド	H17.06.22	H23.06.23
13104	11418	ゆり	秋田プチホワイト	H15.08.19	
13439	11525	ゆり	アキタクイーン	H15.11.18	

8. 学位取得

H24年度 該当なし

9. 視察・見学

月・日	視察・見学者	見学者数
4月計		0
5.21	森吉中学校（職場体験）	3
5.24	大館市立第一中学校（農業体験）	4
5.29	ベトナム、ヴィン・フック省投資貿易セミナー使節団	24
5月計		31
6.12	秋田県農業公社「あきたで農業を」研修生	8
6.15	全肥商連秋田県部会	30
6.22	太平会	80
6.25	産直生産グループしまんこハウス（井川町）	20
6.27	JAしおのやネギ部会（栃木県）	13
6.28	湯沢市水稻直播栽培研究会	10
6月計		161
7. 4	JAあきた白神女性部藤里支部	50
7. 5	JA山形もがみ園芸生産部会	30
7. 9	秋田県農業改良助長協会	40
	JA秋田ふるさと	10
7.10	秋田市中心公民館（中通あすか会）	15
	秋田市立将軍野中学校	6
7.11	秋田県立西目高等学校	37
	湯沢市水稻直播栽培研究会	10
7.18	秋田市立河辺中学校	3
	二ツ井農産物直売組合きみまち杉ちよくん	15
7.19	ヤンマー株式会社	1
7.20	JA大湯村	20
7.25	美郷町南町老人クラブ	20
7.27	秋田県立大学大学院「秋田農林水産学講座」	9
7.28	秋田県農業共済組合連合会	40
7.31	JAつがるにしきた（青森県）	10
7月計		316
8. 1	秋田県農薬販売協会	50
8. 8	秋田県立大学	42

月・日	視察・見学者	見学者数
8.15	茨城県農業総合センター農業研究所	2
8.20	新篠津村「新米塾」(北海道)	9
	秋田市立勝平中学校	1
8.22	日本作物学会東北支部	9
8.27	中嶋貞助商店(横手市平鹿町)	20
8.31	JA秋田おばこほうれんそう部会	20
	農業試験場参観デー	1,550
8月計		1,703
9. 1	農業試験場参観デー	1,010
9. 3	湯沢市水稻直播栽培研究会	10
	JICA(ガーナ)	8
9. 4	JICA(ガーナ)	3
	JAにいがた岩船(新潟県)	20
9. 5	秋田県立増田高等学校	32
	JAあきた北	25
9. 6	JICA(ガーナ)	5
	JA秋田しんせいネギ部会	20
9. 7	JA秋田やまもとアスパラ部会	10
9.12	秋田県立大学生物資源科学部	3
9.13	JICA(ガーナ)	18
9.14	JICA(ガーナ)	18
	JA秋田しんせい	30
9.21	秋田市立御野場小学校	113
9.24	秋田市立金足小学校	28
9.27	秋田市子ども未来部子ども育成課	50
	長野県農業大学校野菜花き実科研究科	7
9月計		1,425
10. 1	手形ニュー友和会(秋田市)	15
10.16	秋田市立勝平中学校	1
10.25	大仙市食生活改善推進協議会西仙北支部	20
10.30	長崎県農業経営改善ネットワーク	15
10月計		51
11. 1	第15回全国農業担い手サミットinあきた秋田地域実行委員会	90
	JAみどりの稲作生産部会小牛田支部	15

月・日	視察・見学者	見学者数
11.16	秋田市東地区社会福祉協議会	60
	秋田市立四ツ小屋小学校	47
11月計		212
12月計		0
1.24	山形県最上総合支庁農業技術普及課	2
1.27	J A秋田おぼこ中仙支店	11
1月計		13
2.14	福島県農業総合センター	3
2.26	J Aみやぎ登米	25
2月計		28
3. 7	大分県農林水産部園芸振興室	1
3.12	佐賀県農業試験研究センター	1
3.19	山形県農業総合研究センター	2
3月計		4
見学者合計		3,944

参考 視察者の受入動向

年度	H19	H20	H21	H22	H23	H24
関係機関・団体（団体数）	20	18	21	12	20	31
各種研究会	18	20	27	27	16	9
学校関係	13	17	26	19	11	14
小学校以下	2	3	1	1	1	3
中学校	3	2	7	9	4	6
高等学校	6	7	7	6	2	2
大学	2	5	11	3	4	3
一般	11	5	8	6	15	6
その他	9	10	14	9	5	6
合計	71	70	96	73	67	66
延べ人数（人）	1,423	1,467	1,592	1,002	1,096	1,359
うち農業関係	1,024	1,159	993	685	800	974
うち県外	385	537	179	311	301	306
※参観デー（上記以外）	3,100	2,500	7,000	10,000	3,320	2,560

※H21及び22年度は「農林水産技術センターファミリーフェスティバル」の人数

平成24年度
秋田県農業試験場年報

平成25年6月 発行

編集・発行 秋田県農業試験場

010-1231 秋田市雄和相川字源八沢34-1

電話 018-881-3330

FAX 018-881-3301

<http://www.pref.akita.lg.jp/agri-ex/>

E-Mail : akomachi@mail2.pref.akita.jp